



JSPS London

NEWSLETTER

No.68
2022 AUTUMN



Floral tributes in honour of Queen Elizabeth II in London's Green Park (photo by Kohei Takizawa)

Contents

- 1 [巻頭特集]
第4回 英国サバイバルセミナー
- 7 センター長の英国観望
第5回 「滞在一年が経過して、新たな連携の実現へ」
- 11 英国学術調査報告(1)
REF2021の概要と分析
- 17 英国学術調査報告(2)
EUの研究助成プログラム「Horizon Europe」への
英国の参加を巡る動向について
- 21 在英研究者の者窓から
第27回 千葉 治紫夏 (Jessica CHIBA)
(Shakespeare Institute, University of Birmingham)
- 23 英国の大学・研究機関紹介
リバプール大学
- 24 ぼりーさんの英国玉手箱
「英国のスーパーマーケットについて教えてください」
- 25 山田さんの徒然なるままに
第11回 「訛りも原因？
ただの個性なのでは??？」
- 27 Voice! from Alumni member
Vol.23 Dr Anna Lisa Varri
(University of Edinburgh)
- 30 Events organised/supported by JSPS London
- 31 JSPS Fellowship Programmes & International
Collaborations Application Schedule

第4回 英国サバイバルセミナー

2022年7月6日(水)に第15回在英日本人研究者会議(JBUK=Japanese researcher's network Based in the UK)である「第4回英国サバイバルセミナー」を開催しました。COVID-19感染拡大以降初の実地開催となった本セミナーでは、30名以上の日本人研究者が集い、研究者としていかに生き抜くか、真剣で有意義な議論が行なわれました。



参加者全員での集合写真

本セミナーではまず、Imperial College London医学部 Sir Ivan Magill 麻醉教授であり、東京医科歯科大学の学外理事でもある高田正雄先生より、若手研究者へのアドバイスについてご講演いただきました。その後、日本学術振興会の事業紹介を挟んで、英国での研究経験が豊富な3名の先生によるパネルディスカッションを行いました。



高田正雄先生 (Imperial College London)

・若手研究者へのアドバイス

英国の大学でマネージメントに携わっており、大学組織につ

いてある程度理解しているので「大学側の視点から」の話をしたい。まず第一に、英国の大学では雇用が強く守られており、一旦probationを通った後には、解雇には相当の理由付けが必要であり、被雇用者が「アンフェア」と感じれば、それを申し出て対抗するのは当然だという認識がある。雇用者側はこれに配慮せねばならず、「何かあったら戦ってもよい」という認識を持つことで、心に余裕ができる。

次に、研究者の実績は主としてローカルに判断され、一つの予算で運営している単位(コストセンター)である「部局」が評価等に責任を持っている。そのため、ローカルに研究実績をアピールすることが重要。

また、一つのことで勝負するのではなく、自分のアカデミックな活動のポートフォリオを作る事が必要である。教育活動も過小評価してはいけない。普通は「研究活動はすればするほど赤字になるもの」で、大学は教育でそれを補填している。要するに、研究活動で大学の評判を高め、それを学生の獲得に利用している。ファンドの応募先を多角化することも重要。産業界のファンドも敬遠せず応募するとよい。上司の言うことを聞くばかりでなく、自分でも情報を集めるべき。英国のファンディングエージェンシーは若い人の相談にも乗ってくれる。

第4回 英国サバイバルセミナー

最後に、これが最も重要かもしれないが、日本人は一步引いてしまう人が多い。日本人は十分ユニークだが、それを国際的なやり方で提示するのが下手。日本的なやり方に固執せず、ヨーロッパの研究者を見習うとよい。不要に躊躇してチャンスを逃さないようにすること。リーダーシップを発揮する機会があればぜひチャレンジするべきであり、研究を行う際のロジカルなやり方は、マネージメントやリーダーシップの仕事にも応用できる。加えて、それらの仕事を引き受けることで組織内での立場を安定化できる。

・パネルディスカッション

今回のパネルディスカッションでは、英国でのキャリア形成や研究活動について、井上 勝晶先生(Diamond Light Source)、長瀬 洋子先生(Oxford Brookes University)、山野 博之先生(UCL Cancer Institute)の3名にお話を伺いました。ファシリテーター(司会進行役)はUniversity College London(UCL)の大沼 信一先生が務めました。

ーファシリテーター、パネリスト紹介ー

大沼 信一先生: UCL Institute of Ophthalmologyの副所長。専門はがんと眼科。UCLと日本との関係のアンバサダーとして、英国と日本との関係をどのようによくしていくかという話し合いをする役割を担っている。1997年に渡英し、ケンブリッジ大学を経て2007年よりUCLに所属。

井上 勝晶先生: 英国唯一の放射光施設であるDiamond Light Source で、物質のX線構造解析を専門としている。日本で放射光施設Spring-8が建設された際、ビームラインの建設に携わった。2008年に英国でDiamond Light Sourceの建設が始まり、自身の専門に係る実験ステーションの建設が始まるというタイミングで渡英。以降は同機関に所属。

長瀬 洋子先生: Oxford Brookes UniversityのSenior Lecturer。専門は経済学。米国で博士号を取得後、10年間米国の大学で活動し、2010年より現職。現在は教育を主とする一般的な勤務体系であり、ティーチングを主としながら研究を行っている。

山野 博之先生: UCL Cancer Institute教授。専門はがん・細胞周期研究。1994年に渡英し、6年間ポスドクとして活動後、3年間 JST の支援を受けて、PI として 2003 年～2010 年までマ

リー・キュリー研究所に所属。2010 年から現職。

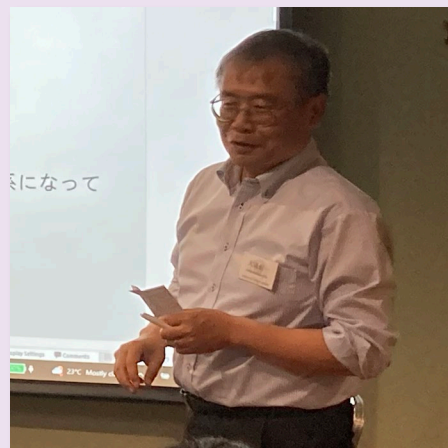
以下はパネルディスカッションの内容の要約となります。

~~~~~

## 【英国でのキャリア形成について】

大沼: デパートメントヘッドとの関係が重要。自分が所属するグループや部局にいかに関与できるかということが効いてくる。社会に対して自分がいる意義があるか、環境を作れているかをアピールすることが重要だと感じている。

山野: 昇進に関しては、自分が大学の中でどれだけ役に立っているのかを示すことが重要。グラントを獲得する際には、自分のビジョンが明確であり、やりたいと思う意志、情熱をどう伝えるかということ、プランの遂行者として自分・チームが最適であることを示せる書き方が重要。他の研究者からも理解できるようにわかりやすく書く工夫も必要。



大沼信一先生(UCL Institute of Ophthalmology)

井上: 大学と違い、研究所は研究がメインであり、そういう面では予算はある程度確保されている。そのため、研究所はその点アドバンテージがあるかもしれない。なお、決してグラントの獲得ができないわけではなく、自分の研究のために申請して審査を通過すれば、その分は新たに獲得することも可能。放射光を専門としてきて、たんぱく質の構造解析の研究をしてきたが、その分野以外の経験も身につけてきた。若いうちは、そのように視野を広げてみるのが重要。研究所でも自分でどれだけ貢献しているかということを実感しないと認められない。研究所でもパフォーマンスレビューが義務付けられており、毎年これだけ成果が出たということを実感し合い、認識し合っている。

## 第4回 英国サバイバルセミナー

長瀬: グラントに関してのアドバイスとして、お金のために応募するのはダメ。自分が何をできるか。何をしたいのかを考え、それを面白いと思ってもらえるかどうかを考えることが必要。ポジションの獲得もグラントの獲得も自分の能力が半分、運が半分だと思っている。獲得できなかったら次に向けて切り替える前向きな気持ちが必要。

大沼: 若い時は、グラントをリジェクトされた際のショックは大きいと思う。落ちたからと言って落ち込む必要はなく、挑戦し続けることが大切。

## 【英国での研究活動について】

山野: 日英の共同研究については、日英で互いに補い合うことが大事。共同研究について、英国の方が垣根が低い印象。一度やると決めたら、どこでどのように応募すればお金を取れるかという点なども含めて、英国はスピード感があると感じている。日本ではある程度固めてから世に出して、動き出す印象がある。

井上: 研究を進める上でのスピードが英国は速い。例えばコロナの研究でも2月にパンデミックとなり、すぐに研究所ではコロナの研究が始まり、コロナに関する知見はすぐにHPに公開、共有された。日本の同じような研究施設は、その時点では何もアクションを起こしていなかったと思う。

長瀬: 失敗談として、研究が進んでいないテーマについて、人からデータを集めて研究したい場合、個人のデータを使っていいというコンセンサスを一人一人から集める必要がある。教授をしているので、ティーチングに関するデータは集まってくるが、そのデータを使えない。一人一人にサインをもらう必要がある。オプトインの難しさがわからない中で、いざデータコレクションをしようと思ったら集まりませんという状況になってしまった経験があるのでこれは失敗談。

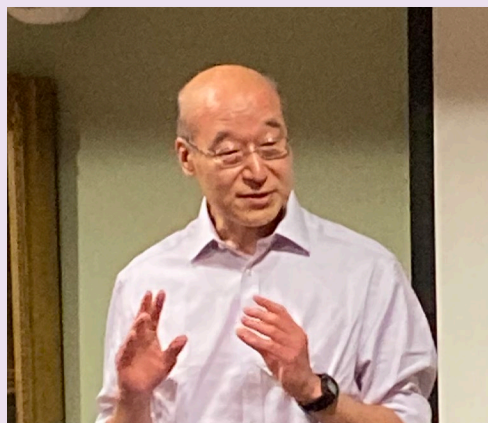
## 【グラントが採択されなかった時のストレスのコントロール方法、どのように立ち直ったか】

山野: 運の要素もかなりあるので、すぐに気持ちを切り替える。グラントの場合はとにかく諦めずに応募することが重要。他の人の成功したグラントが参考になる。近くで成功した人から話を聞いたり、いくつか申請書を見せてもらって少しずつバージョンアップして作り上げていくとよい。

長瀬: グラントの採択数は限りもある。どんなによいものを作っても、(相対評価なので)落ちるときは落ちる。変化球の答えだが、グラントの採否に自分の生活が懸かっている海外の生活をしようと考え、グラントよりもティーチングの方をしっかりとすることを考えた。そうすれば簡単には解雇はされない。それで研究に対するストレスマネジメントを選択してきた。

## 【上司やチームでうまくやっていくためにはどうしたらよいか】

井上: 淡々と、黙々とやる姿勢を貫いてきた。やらなければいけないことは決まっているので、まずはやるべきことをきちんとこなすことが重要だと思う。それを継続することもアピールにつながる。



山野 博之先生 (UCL Cancer Institute)

山野: 上司やチームとの関係が良好であれば、何か役に立つ提案をしたらよいのではないかと。今の部署、ファカルティでこういうのがあったらよいのではないかと提案 (例えば、大学ならグラント応募を次期考えている人の研究計画を聞いてアドバイスするグラントクリニック等) をするとよいのではないかと。ちょっとした企画、アイデアでもいいので、提案してみることが大事。

大沼: 「何かやろう」と提案しても「No」とはならないのが英国の環境ではないか。

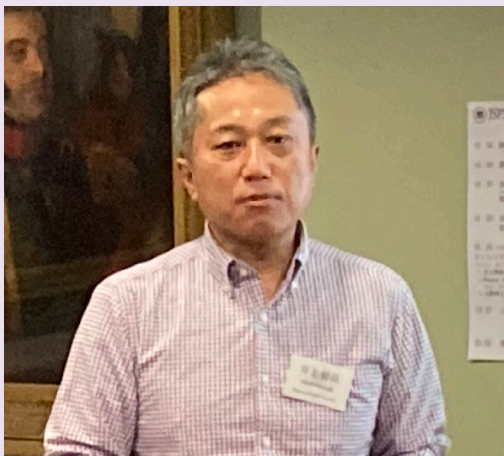
長瀬: 私は自分がチームにどのような形で貢献できるかを考える。チームとして様々な仕事をどのようにこなすかを考える上で、自分がどのように貢献できるかを考えている。それをチームマネージャーは見ている。一方、チームとは別に自分のテリトリーを決めて進める人もいますが、それだと長続きしないと思う。

## 第4回 英国サバイバルセミナー

会場から：自分の経験談として、間違えるのが怖い、気後れする、完全主義というのが日本の文化。自分は学会に出たら必ず質問すると決めた。内容のないことは言わないようにして、しっかり質問するというのをハードルとして自分に課した。当たり障りのない質問をしていくうちにだんだんうまくなっていく。海外では、話さないことは存在しないことと同じと捉えられてしまう。そのせいで日本人は優秀な人が多いのにオピニオンリーダーになるような人が少ないように思える。

## 【英国をはじめ世界から日本人に期待されていることはあるか】

井上：正確性や緻密さ、与えられたことをきっちりこなすということは期待されていると思う。海外の人は日本人や日本の文化に興味を持っているが、日本人は特に積極的に日本のことをアピールする性格ではないので、それが伝わっていないことがあると思う。



井上 勝晶先生 (Diamond Light Source)

## 【日本の研究者はアピールが下手という話があったが、日本の研究者が持っている強みは何か。また、アピールしていくことでキャリアが開かれていくということに気づいたきっかけや転機はあるか】

大沼：昔は自分も人前で話すのが苦手だったが、最初に海外に出たとき以降は偉い先生相手でもためらうことはなくなった。日本ではソーシャルなプレッシャーがあるのかもしれない。

山野：学会、会議で質問することは大事。周りの人は見ていないように見ている。質問していれば、後で声を掛けられること

があり、それが、人の輪、人脈形成につながる。「積極的」と評価されたり、他のPIからも推薦書を書いてもらえることもあるので、ちょっとしたことで質問(自己アピール)することは重要。

長瀬：クレバーなことが言えなかったら、わからないことを聞くことが大事。質問ならいつでもできる。聞いてみるうちにだんだんとためらいがなくなってくる。慣れてきたら、この質問とその質問でどちらがいい質問か、ということを考えて質問するようになった。

大沼：質問は重要。自分がケンブリッジの教授職に応募した際も、面接に行ったら、相手は私の事を知っていた。自分は覚えていなかったが、ケンブリッジのミーティングでディスカッションしたことがあったらしい。UCLの眼科の応募の際にも、相手はこちらを知っていた。コミュニティは狭く、色々なところにつながりができてくる。

井上：皆さんと反対かもしれないが、淡々と仕事を続けていこうということを決めた。ある時、同僚から「君はミステリアスだが仕事ができる」と言われた。その時にミステリアスでもよいと思った。やるべきことをきちんとこなすことで、理解を得られたしアピールにつながったと思う。

山野：日本人は器用で、単純作業など正確に仕上げてくる能力がある。ただ、オリジナルなアイデアを想起する、提案するというようなものは必ずしも日本人は得意でないかもしれない。

長瀬：日本人として期待されていることとして責任感もある。仕事を任せたらまずやる、終わらせるだろう。そういう信頼はある。

会場から：個人的にはいままでのステレオタイプな勤勉さ、といったもの以外のバリューを持つべきではないかと思っている。アカデミアとしてはオリジナリティを追求すべきと思っている。独特の感性を持っている人も多いと思う。

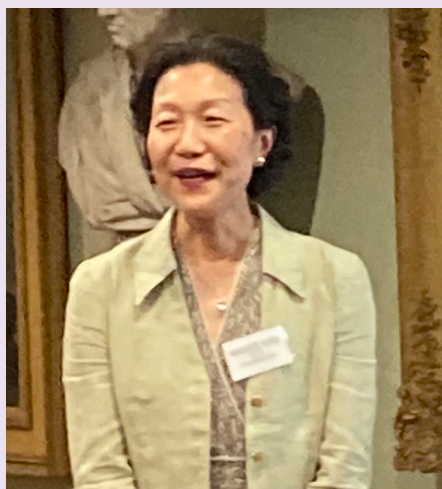
## 第4回 英国サバイバルセミナー

## 【英国で就職するためにはどのようにしたらよいか】

大沼: 英国では研究職の公募はオープン。どういう人が好ましいか、という条件が決まっていることはある。

山野: 自分がPIになりたいという強い思いがあるかどうか。自分の売りの技術と論文があるか。英国の場合アプローチの仕方として、一つ目は、フランシス・クリック研究所のような研究資金の豊富な研究所に応募する方法。二つ目は、ホストの大学・研究所を見つけて、フェローシップに応募する方法。フェローシップを取れる人は優秀なので、「取れれば受け入れてくれるか」とホストに言えばまず断られない。最後に、大学のLecturerとして教育のポジションを獲得して、空いた時間に研究を行う方法があると思う。

長瀬: 私はごく普通の大学教員。私のような形を目指し、英国のアカデミックポストが欲しいのであれば、まず“jobs.ac.uk”を確認し、応募する。ここに経済・人文系も含め、すべて載っている。ここでLecturerポスト等の空きも探せる。もし狙っている研究機関があるのであれば、その機関のサイトに必ず掲載されるのでチェックすべき。応募するにあたって外国人が注意する点として、Essential Criteriaを必ずクリアする必要があるということ。これができないと面接に呼ばれない。



長瀬 洋子先生 (Oxford Brookes University)

大沼: Job descriptionで職をとるには個々の内容に基づいた自分のカバーレター等を出すことが必要。同じCVを使い回すようでは採用されない。分野に関わらず、何を求められているかを理解する必要がある。Essential Criteriaは20個くらいあり、それぞれをできるかどうかで点数化される。

## 【キャリアを追求し、進めていく上で家族や親のこともある。ワークライフバランスをどのように考えているか。】

井上: 子供の教育のことも考えると、自分たち夫婦間ではできるだけ長く英国にいるほうがよいと話している。主に仕事をしているのは僕自身なので、色々なことを選択が僕の仕事の状況とリンクしているが、奥さんの意見は物事を決める上で最重要な要素だと思っている。パートナーの意見や気持ちをよく汲み取ることが大切だと思う。

山野: 以前は家内が定期的に日本へ帰りたいがる傾向があった。海外に住んでいると、老いていく両親、老後にいかに対処するか等は誰しもの共通の悩みだと思う。ただ皆自分のミッション(覚悟)をもって海外に来ていると思うので、それを達成するためにはある程度の犠牲(痛み)は避けられない。一方、人の幸せは色々なカタチがあるので、当事者、家族と十分話し合うことが大切である。必要であれば一度日本で就職して、また機が熟せば戻ってくるということも考えられる。

長瀬: ワークライフバランスは、米国から英国に移った大きな理由の一つ。米国では離婚者も多く、仕事の比重が非常に大きいので、英国に来た。英国で研究メインのポストを蹴って今の大学に来たのもそれが理由。仕事の安定は大事で、健康でなく収入がなければ研究もできないので、これらのことも考えて仕事を選ぶことが大切。



パネルディスカッションの様子

~~~~~

以上がパネルディスカッションの要約ですが、全体を通して、活発に質疑応答が行われ、大変有意義な会合となりました。また、COVID-19感染拡大以降最初の実地開催のイベントでしたが、続くネットワーキングセッションも盛況でした。最後に、ファシリテーター、パネリストをお務めいただきました先生方および小林センター長より、コメントをいただきましたので掲載いたします。

第4回 英国サバイバルセミナー

◆高田 正雄 先生◆

今回のセミナーでは久しぶりにJBUKのメンバーの皆様と対面でお会いしディスカッションすることができて、楽しい時を過ごしました。日本社会のイノベーション創出力の低下が問題となっている現在、アカデミアに期待される役割は非常に大きくなっていると思います。私は今までいろいろな国を見てきましたが、日本人の「物事の細部に対する感受性」や「繊細で独特な物の見方」には非常にオリジナリティがあり、他の民族になかなか真似ができないと感じています。ただ我々は文化的に心の中に躊躇し遠慮する部分が常にあり、その心理学的な障壁が発展を妨げているように思います。まだまだ自分のポテンシャルを十分活用していない可能性があることを認識し、マインドセットを変えて大きく考え、自分たちの感性をうまくグローバルライズできれば、日本人は独自の領域を切り開き、もっとも世界に意見を発信していける可能性を秘めていると考えます。そういった意味で、本日お話したティップスが、現在英国で活躍されているJBUKのメンバーの方々の方々の今後のキャリアに多少ともお役に立てれば、幸いです。

◆大沼 信一 先生◆

今回ファシリテーターを務めた大沼です。今回のセミナーでは、若手研究者の大きな熱量を感じ、それをいかに前に進めていくかの重要性を再認識しました。私はより多くの日本人研究者が世界で活躍することを常に願っています。日本人の若手研究者には、その能力を持っています。そのためには、目標を設定し、その達成に向けて全力で取り組む必要があります。そうすれば、今回のセミナーの参加者のほとんどは海外で独立できると思います。私はそのような意欲のある若手研究者をサポートできればと思っていますので、気軽に声をかけてください。世界中で日本人研究者が活躍する時代が来ると素晴らしいですね。

◆井上 勝晶 先生◆

まずはこのような機会をいただいたことに感謝いたします。他のパネリストの先生や参加された皆さんのお話を伺って、「これが正解でこうしなければならない」ということは、決してないということを改めて感じました。間違いなくよい刺激を受けましたし、自分自身の今後についても考えてみるよききっかけになると思いました。

◆長瀬 洋子 先生◆

Thank you very much for inviting me to the event. It was very exciting to see that there are many of us aspiring to succeed in

the UK. Needless to say, one must work hard. But it is also important to acknowledge that there is no 'one size fits all' way to establish a career as a researcher. My recommendation is to keep your eyes open, and your mind open. Chances come to those who are ready and can see them. It is also very important to know your capability, personality, likes and dislikes, and risk preference, so that you will choose a job in which you shall thrive!

◆山野 博之 先生◆

コロナ・パンデミック後の最初の対面式ミーティングで、様々な分野、年齢層のやる気にあふれた方々が集まり、限られた時間でしが活発な議論ができたと思います。「サバイバル」と言うと非常に切羽詰まった雰囲気があるが、やはり人生は楽しむことも大切である。これぞ英国流。自分の周りに起こること：成功も失敗もすべてを受け入れ、後は解釈のしかたで、すべての経験がポジティブに生かされると思う。自己分析して、正しい方向にベクトルを向け、正しい努力をすれば、必ず目標は導かれます。ゆるりと笑顔で頑張りましょう。また皆さんにお会いすることを楽しみにしております。

◆小林 直人 センター長◆

今回の第4回サバイバル・セミナーは、2020年に始まったコロナ・パンデミックの後に、JSPSロンドンとして初めて開催できた、ある意味「記念すべき」会合でした。職員もほとんど皆初めての経験であったので、色々行き届かない点もあったかもしれませんが、無事開催できて多くの在英研究者の方々に喜んでいただけたと思います。我々も多くの参加者と初めて対面でお会いする機会を得て大変嬉しく感じています。

参加者の主な関心事は、英国でどのように研究を継続・発展させるか、どのようにアカデミックポジションを獲得するかでしたが、高田先生のご講演、大沼先生にファシリテーションをお願いしたパネル討論からかなりの大切な知見を得られたのではないかと考えています。特に、ポジションを獲得するにしても特別な方法があるわけではなく、『常に有益な情報を得る努力をする』、『多くの関係者の話を聞く』、『失敗しても挫けない』等のアドバイスが印象深く感じられました。

セミナー終了後のレセプションでもあちこちで自己紹介や有益な情報交換の話で盛り上がり、時間が足りなかったのが残念です。次回も同様な試みの必要性を感じていますので、今回の例を参考に改善を期していきたいと思います。

最後に、講演およびパネル討論に参加された先生方に改めてお礼を申し上げます。

センター長の英国観望

第5回 「滞在一年が経過して、新たな連携の実現へ」

ロンドン研究連絡センター・センター長
小林 直人



1. はじめに - プラチナ・ジュビリー、新首相就任 そして女王の逝去

早いもので去る8月初旬で、ロンドンに赴任してから1年が経ちました。6月から9月には、英国では歴史的な出来事が続き貴重な経験をしました。

6月2日から5日にかけてはエリザベス女王の在位70周年の祝賀行事「プラチナ・ジュビリー」が行われました。初日にはバッキンガム宮殿近くにあるホース・ガーズという場所で「トゥルーピング・ザ・カラー」と呼ばれるパレードが行われました。私は午前9時頃に近くまで行きましたが、大変な人混みなので、バッキンガム宮殿に向かう直線道路（ザ・マル）から宮殿を望む写真（右の写真左上）を撮って帰り、TVでパレードを楽しみました。2日目はセント・ポール大聖堂での記念礼拝が、3日目にはバッキンガム宮殿の前での記念コンサートが行われました。また、4日目は色々な団体が様々な衣裳と見せ物でパレードを行う「プラチナ・ジュビリー・ページェント」がありました。私はウェストミンスター付近で女王が70年前の戴冠式の時に実際に乗られた馬車（右の写真の右上）を見ることができました。

7月7日のボリス・ジョンソン首相の辞任発表を受けて、直ちに保守党首選が始まりました。当初はアフリカ系1人を含む女性3人、インド系1人を含む男性2人と多様な候補者5人によるTV討論会が行われました。最終的にリシ・スナク前財務相とリズ・トラス外相の一騎打ちになり、1ヶ月にわたる保守党内での選挙活動と一般投票を経て、9月5日にトラス新首相が選出されました。彼女は英国で3人目の女性首相になりますが、BREXIT後の経済政策、特に物価高・エネルギー高・労働力不足等を背景に、どう舵取りしていくかが注目されるようです。

9月6日、エリザベス女王の滞在するスコットランドのバルモラル城で、トラス新首相は女王から首相任命を受けました（写真右の左下）が、その2日後の9月8日にエリザベス女王が亡くなりました。当日昼頃には女王の体調が優れないので医師団の

管理下に置かれたというニュースが流れ心配していましたが、夕刻には訃報が流れて大変驚きました。その直前に私のフラットのテラスからセント・ポール大聖堂の上にかかる虹を見ることができ（写真右下）、とても不思議な感じを覚えました。

その後、英国中が喪に服し、9月13日にはエディンバラからロンドンにエリザベス女王の棺が運ばれ、安置されたウェストミンスター・ホールにはその後の4日間で数十万人の人が弔問に訪れました。また、TVのインタビューでは多くの英国国民が女王への深い哀悼と悲しみの情を表明していました。9月19日にウェストミンスター寺院で葬儀が厳かに行われ（写真中央下）、各国首脳に混じて日本からは天皇・皇后両陛下が参列されました。エリザベス女王は70年にわたって女王としてその地位に留まり、英国国民だけでなく世界中の人から愛され続けてこられた優雅で気品とユーモアに溢れた素敵な方だったと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

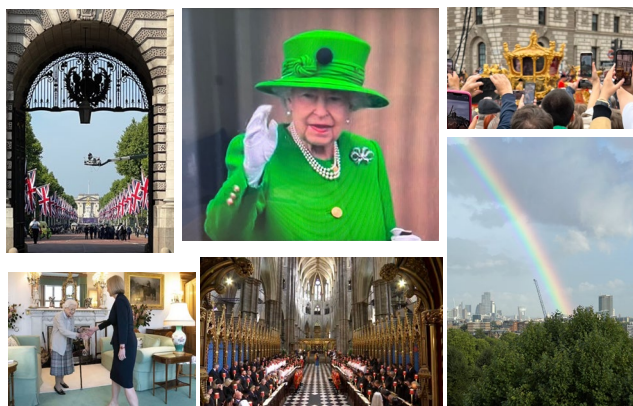


図1. 上段：プラチナ・ジュビリー祝典の様子。中上：6月5日最終日、バルコニーに立つ女王。右上：70年前の戴冠式で使われた馬車。左下：女王によるトラス首相の任命。中下：女王の葬儀の様子。右下：女王逝去の日の夕刻にロンドンの空にかかった虹。（左上、右上、右下は実写。他はTV等から借用。）

センター長の英国観望

2. 3大学訪問

6月から7月にかけて3大学を訪問し、JSPSロンドン研究連絡センターの活動を紹介し、国際共同研究に関する意見交換を行いました。どの大学も、日本での研究のためのフェローシップ応募や国際共同研究の推進に意欲的な印象を受けました。

サウサンプトン大学はロンドンから南西に約110kmの海沿いに位置する理工系中心の総合大学です。表1に他の2大学を含めた創立年、学生数、アカデミックスタッフ数等を示します[1]。

同大学は私の専門分野の一つである光工学分野では有名で、EDFA(Erbium Doped Fiber Amplifier: エルビウム添加ファイバー増幅器)という技術を開発した、ノーベル賞候補と目されるProf. David Payneを中心とした光デバイス分野のグループ(Nanophotonics Group)があります。当日は、Prof. Peter Smithに光デバイス用のクリーン・ルームを案内していただきました。彼は、英国は基礎研究に強いが応用研究に弱く、大学と産業界との連携が少ないことを課題の一つに挙げていました。その理由として、ドイツのマックス・プランク研究所やフ라운・ホーファー研究所のような大型国立研究所がないこと等を指摘していました。JSPSの活動紹介のセッションでは、フェローシップでの家族への支援、国際共同研究での経費の使い方、WPI(World Premier International Research Center Initiative)の詳細等に関する質問がありました。

大学名	創立年	学部/ 学科・研究科数	学生数 (学部)	学生数 (大学院)	アカデミック スタッフ
サウサンプトン大学	1862/1952	5/18	14,325	7,070	2,645
リバプール大学	1881/1903	3/74	22,250	6,935	3,085
マンチェスター大学	1824/1904	3/31	28,990	15,645	5,060

表1. 3大学の創立年、学科・研究科数、学生数、アカデミック・スタッフ数（創立年の早い方は前身の学校の創立された年）

次はリバプール大学です。リバプールは産業革命が英国で起きた時の中心地の一つとして有名ですが、現在でも科学やエンジニアリングの研究が盛んです。同大学は9名のノーベル賞受賞者を輩出している名門校でもあり、昨年実施された研究評価REF2021[2]では、地球・環境、化学、物理、コンピュータ科学等の分野においてアウトプット(研究成果)が高く評価されました。前述のサウサンプトン大学も参加していますが、日本の6大学(京都大学、九州大学、名古屋大学、大阪大学、立命館大学、東北大学)と英国の6大学(ダラム大学、エディンバラ大学、リーズ大学、リバプール大学、ニューカッスル大学、サ

ウサンプトン大学)が研究教育協力を行っているパートナーシップRENKEIにも参加して意欲的に活動しています[3]。日本との共同研究も盛んで、環境水力学を専門とするProf. James Cooperからは環境リスクや気候変動の分野で筑波大学を含む、日本の10研究機関と進めている共同研究の紹介がありました。その例は、(1)福島第一原子力発電所からの放射性の環境調査、(2)世界最大級の降雨シミュレータによる台風の洪水浸食の予測、(3)洪水や浸食が重要インフラに及ぼす影響等です。

最後はマンチェスター大学です。マンチェスターもリバプールと同様、産業革命の中心都市でしたが、同大学もリバプール大学と同じように20世紀初頭に大学となっています。現在同大学は、REF2021でも研究力で5位になる等、強力な研究基盤と研究水準を誇っています。特に生物学、化学、材料科学、政治学、社会学等、自然科学及び社会科学の分野で高い卓越性を示しています。また産業界とのつながりにも力を入れており、先端材料に関する国立研究所Henry Royce Instituteの連携ハブ大学として学内で幅広い共同研究を行っています。なお、同大学に関連した35名のノーベル賞受賞者の中には、グラフェンに関する研究で受賞したアンドレ・ガイム博士及びコンスタンチン・ノボセロフ博士がおり、学内にはグラフェンの研究と実用化を目指した、国立グラフェン研究所(NGI)とグラフェン・エンジニアリング・イノベーション・センターが設置されています。私達はそれらの研究所を見学し、同時に何人かの研究者から話を聞きましたが、その多くは日本の研究者との共同研究の経験があり、双方のメリットを活かした相補的で有効な共同研究が行われていることを知ることができました。



図2. Faculty of Science and Engineeringの国際共同研究関係の研究者・スタッフと。

センター長の英国観望

3. 英国の「ネット・ゼロ戦略」と研究開発

2021年10月から11月に英国グラスゴーでCOP26(第26回国連気候変動枠組条約締約国会議)が開催されましたが、それに先立ち同年10月に英国政府は「ネット・ゼロ戦略(Net Zero Strategy: Build Back Greener)」を発表しました[4]。本節では、その概略とそれに関わる研究開発の現状をご紹介します。

英国政府は2008年に気候変動法(CCA: Climate Change Act)を施行し、2020年および2050年の炭素削減目標を決定しました。また、その目標達成に向けた活動を監視し進捗状況を議会に報告する独立機関として気候変動委員会(CCC: Climate Change Committee)が設置されました。2019年にはCCAを改正して「2035年までに炭素排出量を1990年のレベルと比較して78%削減し、2050年までに『ネット・ゼロ(正味の炭素排出量をゼロにする)』を実現する」ことを義務付けました。これは先進経済国の中では初めてのことでした。

その後も、「グリーン・ファイナンス戦略」(2019年)、「第6次カーボン・バジェット」(2020年)、「エネルギー白書」(2020年)、「グリーン産業革命」(2020年)、「産業脱炭素戦略」(2021年)と立て続けに戦略や方針を決定し、その集大成が「ネット・ゼロ戦略」となったわけです。この中では、特に(1)洋上風力発電の推進、(2)低炭素水素の開発、(3)ゼロ・エミッション車への移行、(4)建物の熱効率改善、(5)炭素回収・利用・貯蔵(CCUS)への投資、(6)自然環境保護等を通して、2018年の時点で年間481メガトンのCO₂排出量を2050年には年間80メガトン程度にまで減らし、残りの部分を温室効果ガス除去で減らして実質的に「ネット・ゼロ」を実現することを目標としています。

このように英国では政府に限らず多くの組織で、「戦略策定」→「計画立案」→「実施」→「報告」→「点検・評価」というサイクルを回して政策を実行していくのが得意です。特に注目したいのは、このサイクルの中の「点検・評価」の作業です。具体的には上述のCCCが最近「ネット・ゼロ戦略」の進捗状況に関する報告書を出して警告を発しています[5]。この中では、2050年に「ネット・ゼロ」を達成するためには、(1)市民の関与、(2)政府のガバナンスの明確化、(3)労働におけるスキルの向上、(4)温室効果ガス除去への過度の依存を正等の改善策を提言しています。今後、これらの提言を受けて、政府がどのような対応策を講じるのか、注目の的です。

一方、「ネット・ゼロ」に向けた研究開発も大学を中心に活発に行われています。それにはUKRI傘下の自然環境研究会議

(NERC: Natural Environment Research Council)が数10年にわたって中心的な役割を果たしてきました。特に①長期データセットの作成、②生物多様性・生態系プロセスに関する最先端の科学、③保管理・警告システムのための予測モデルの作成、④人々との交流、⑤政府や産業界との効果的なパートナーシップ等を視野に入れた研究助成をしています。最近の例では2022年2月に「英国のグリーンな未来に£4,000万を投資する」という発表を行いました[6]。図3にそのプロジェクトの概略を示しますが、(1)生物多様性の改善(エクセター大学)、(2)ネット・ゼロ都市の実現(グラスゴー大学)、(3)農村コミュニティの気候変動への適応支援(ケンブリッジ大学)、(4)政策決定のためのデータ、分析、エビデンスの提供(オックスフォード大学)の4プロジェクトに対して、それぞれ£1,000万の助成金が支援されています。

前述の研究評価REF2021でも、研究の社会的効果を示すインパクトの成果として地球温暖化に関連したテーマが多く提出されました。例えば全6,781件の事例中で、約1割の637件がインパクトとして「気候変動」に関するものでした。また「生物多様性」関連では248件、「温室効果ガス」関連は133件、「ネット・ゼロ」関連は120件等、全体としてこの分野の研究インパクトの多さが際立っています。

興味深いインパクト事例では、「生物多様性」に関連して経済の分野への影響を述べたもので、ケンブリッジ大学が提出した「国家の富の包摂的尺度の開発」があります。これは、従来のGDPに代わり、生物多様性を含む自然・社会資本を新たな富の尺度として導入すべき、との提言で、国連や英国産業戦略会議に大きな影響を与えたとされています[7]。

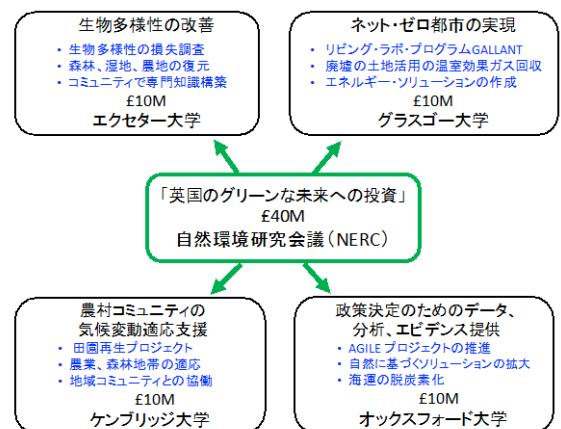


図3. NERCによるプロジェクト「英国のグリーンな未来への投資」の具体的内容。

センター長の英国観望

4. モーツァルト一家のロンドン滞在

幼いウォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~1791年)が姉ナンネルと一緒に父レオポルドに連れられて、ロンドンに滞在したことがあることはご存知でしょうか。モーツァルト一家はパリでの演奏旅行を終えて、1764年4月23日にロンドンに来て、右の写真、下左にあるコベントガーデン近くの床屋の2階(9 Cecil Court)に住み始めました。ウォルフガングが8歳、ナンネルが13歳の時です。ロンドンに着くとすぐ父レオポルドは二人の子供をバッキンガム宮殿に連れて行き、国王ジョージ3世の前で演奏させました。国王はひどく感激をしたそうです。当時ロンドンには、ヨハン・セバスティアン・バッハ(大バッハ)の一番下の息子、ヨハン・クリスティアン・バッハが滞在していました。ウォルフガングと彼はすぐに意気投合して合奏を始めました。そして、クリスティアンは幼いウォルフガングがその後作曲家として成長する上で、良き師だったと言われています[8]。

父レオポルドが重い病気になったため、一家は8月にロンドン西方のチェルシー近郊の家(180 Ebury Street)に引っ越ししました。右の写真、右下・上の写真がその住まいと銘板です。銘板には、ウォルフガングが、その住まいで交響曲第1番を作曲したことが書かれてあります。その曲は1765年2月にHaymarket Little Theatreという所で初めて演奏されたそうです。またウォルフガングはこの時期、病気の父のためにピアノの音を出すことができなかったので、「ロンドンの楽譜帳」に記した一連の43の小品の作曲を開始しました。この中には中々可愛い素敵な曲がたくさんあります。

その住まいから少し離れたオレンジ・スクウェアという所に少年ウォルフガングの銅像がありました(写真中)。バイオリンを手に持って厚い楽譜の上に乗っています。この銅像はモーツァル

ト没後200年を記念して1991年に建立が計画され、1994年9月21日にマーガレット王女によって除幕式が行われたそうです。

父レオポルドは妻アンナ・マリアの懸命の看病のおかげで1ヶ月ほどで健康を回復し、モーツァルト一家は9月の末にロンドン中心部のSOHO(20 Frith Street)に移りました。その後もモーツァルト姉弟はバッキンガム宮殿や各所で演奏活動を行いました。

一家は1765年8月1日にロンドンを発ち、オランダに向かいました。幼いウォルフガングはロンドンで大変充実した時を過ごすことができ、思い出深い滞在になったようです。

私は作曲家の中ではモーツァルトが一番好きなのですが、ロンドンにある彼のゆかりの場所を3ヶ所訪れることができ大変印象深く、大きな感銘を受けました。



図4. モーツァルト一家のロンドンでの住まい。左: 最初のコベントガーデン近くの住まいと銘板。中: 2番目の住まいの近くのオレンジ・スクウェアにある少年モーツァルの銅像。右: 2番目のチェルシー近郊の住まいと銘板。(全て実写。)

[1] HESAウェブサイト <https://www.hesa.ac.uk/data-and-analysis/students/whos-in-he#numbers>

[2] REF2021ウェブサイト <https://www.ref.ac.uk/>

[3] RENKEIウェブサイト

<https://www.britishcouncil.jp/en/programmes/higher-education/university-industry-partnership/renkei/about>

[4] “Net Zero Strategy: Build Back Greener” <https://www.gov.uk/government/publications/net-zero-strategy>

[5] “Progress in reducing emissions 2022 Report to Parliament”

<https://www.theccc.org.uk/wp-content/uploads/2022/06/Progress-in-reducing-emissions-2022-Report-to-Parliament.pdf>

[6] NERC invests £40 million in a green future for the UK

<https://www.ukri.org/news/nerc-invests-40-million-in-a-green-future-for-the-uk/>

[7] “Developing inclusive measures of the wealth of nations”

<https://results2021.ref.ac.uk/impact/eaf20574-5345-40d5-85e4-76cf095178de?page=1>

[8] R. W. Gutman, “MOZART A Cultural Biography”, Harcourt Brace & Company (1999).

REF2021の概要と分析

ロンドン研究連絡センター・センター長
小林 直人

1. はじめに- REFの概要

すでにニュースレター67号の「センター長の英国観望」の中で、REF2021の結果とその特徴を示したが、本稿では改めてREF2021の概要と分析を述べることとする。

REF (Research Excellence Framework) はサッチャー政権下の1986年に開始された大学研究評価RAE (Research Assessment Exercise) が2014年にREFに名前を変えられて継続されているものであり、REF2021はREFとして2回目の評価である。REFはイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4つの高等教育資金助成機関が共同で実施している[1]。その目的は、従来から(1)研究への公的投資に対する説明責任を明らかにし、投資効果のエビデンスを提示すること、(2)大学に関する公開のベンチマーク情報を提供し、評価の基準を確立すること、(3)評価結果を元に、2022年～2023年の大学への研究助成金額を決定し通知すること、であるが、今回はさらに(4)国の研究の優先順位の戦略的決定のための豊富なエビデンスを提供すること、(5)大学と個々の研究者に強力なパフォーマンス・インセンティブを与えること、(6)個々の大学内での研究資源割り当てに利用すること、が付け加えられた。

研究評価は、研究成果であるアウトプット、研究の社会的影響等のインパクト、研究環境の3項目で行われる。アウトプットは論文、著書、制作物、ソフトウェア等の直接的な研究成果であるが、インパクトは、社会・経済・文化・環境・健康・生活等の便益として広く定義され、純粋に学術分野でのものは含まれない。インパクトを生み出すシーズとなったアウトプットは評価期間終了の20年前まで遡ることが可能である。研究環境には評価期間中の博士号取得者数、総研究収入、インフラ・設備、研

究支援環境等が含まれる。REF2014では研究のアウトプットが65%、インパクトが20%、研究環境が15%の重みづけで評価がされたが、REF2021ではアウトプット60%、インパクト25%、研究環境15%の重みづけで評価が行われた。

研究評価の主要分野(メイン・パネル)は4分野[A:医学、健康および生命科学(以下、生命科学)、B:物理科学、工学および数学(以下、理工学)、C:社会科学、D:芸術および人文科学(以下、人文科学)]に分かれている。また基本的な評価単位(UoA: Unit of Assessment)が全部で34あり、パネルAには6ユニット、パネルBには6ユニット、パネルCには12ユニット、パネルDには10ユニットが存在する。REF2014では全てのUoAの数は36であったが、パネルBのエンジニアリングに関する異なる4ユニットを一つに統合したことと、パネルCに新たにArchaeology(考古学)を加えたことにより、全体として2ユニットが減ることとなった。

全ての評価は各UoAのサブ・パネル(評価委員会)におけるピアレビューで行われる。全ての評価委員名は公表されている。なおパネルA、BおよびCに属する11ユニットでは、アウトプットの評価の際に被引用数のデータも参考のために利用されていることが明らかにされている。

評価はクオリティ・プロファイルと呼ばれる4段階の評価基準で示されるが、その内容を表1に示す。4*と3*について、アウトプットでは、「世界をリードする研究成果」と「国際的に優れている研究成果」、インパクトでは、「極めて優れたインパクト」と「非常に大きなインパクト」、研究環境では、「世界をリードする研究を生み出し、卓越したインパクトを可能にする環境」と「国際的に優れた研究を生み出し、非常に大きなインパクトを可能

■ □ ■ 英国学術情報 ■ □ ■

JSPSでは英国を含めた海外の学術・教育・研究に関わる情報をまとめて発信しています。その中では、大学ランキング情報や、英国政府の発表する学術研究分野への政策、その影響等についても情報提供しております。

ご興味のある方は是非ご覧ください。 [https://www-overseas-news.jsp.s.go.jp/?s&item=news&mode=simple&country\[\]=britain](https://www-overseas-news.jsp.s.go.jp/?s&item=news&mode=simple&country[]=britain)

英国学術調査報告

にする環境」と定義されている。

	アウトプット	インパクト	環境
4*	独創性、重要性、厳密性の点で 世界をリードする 質	影響範囲と重要性の点で 極めて優れた インパクト	活力と持続可能性の観点から、 世界をリードする研究を生み出し、卓越したインパクトを可能にする 環境
3*	独創性、重要性、厳密性の点で 国際的に優れている が最高水準の卓越性には及ばない質	影響範囲と重要性の点で 非常に大きな インパクト	活力と持続可能性の観点から、 国際的に優れた研究を生み出し、非常に大きなインパクトを可能にする 環境
2*	独創性、重要性、厳密性の点で 国際的に認められている 質	影響範囲と重要性の点で かなりの インパクト	活力と持続可能性の観点から、 国際的に認められた研究を生み出し、かなりのインパクトを可能にする 環境
1*	独創性、重要性、厳密性の点で 国内的に認められている 質	影響範囲と重要性の点で 認識されるが、控えめな インパクト	活力・持続可能性の観点から、 国内的に認められた研究を生み出す 環境

表1. REFにおけるクオリティ・プロファイルの定義

2. REF2021の特徴

REF2021の研究評価対象期間は、2013年8月1日から2020年7月31日までの7年間であり、アウトプットは2014年1月1日から2020年12月31日の間に発表された研究成果、インパクトは、評価期間中に実現されたもので、それに寄与した研究が2000年1月1日から2020年12月31日までの期間に発表されたものとなる。また、研究環境も評価期間中に該当するものが有効である。当初、成果報告書の提出期限が2020年11月27日であったが、COVID-19のために4ヶ月延期され、2021年3月31日になった。

表2にREF2021とREF2014の様々な指標の比較を示すが、今回の最も大きな違いは成果提出研究者数が前回よりも46%増えたことである。これは、前回は学部や学科の一部の研究者のみからの成果提出でよかったものが、今回は全員の研究者(教育だけに携わる者は除く)からの提出が求められたことによる。一方で、前回は研究者(実際はFTE(Full Time Equivalent: 常勤換算))1人あたり4件の研究成果の提出を求められたのに対し、今回はそれが平均2.5件(最高5件、最低1件)の提出に変更されたので、アウトプット数はむしろ減ることとなった。

なお、インパクト事例研究の提出数も前回と変化があった。REF2014ではあるUoAに提出するインパクト事例研究の数は、その大学のそのUoAに関連するFTE数が15未満では2件、その後FTE数が10増えるごとに一件ずつ追加していく決まりになっていた。REF2021ではFTE数が20未満では2件で、その後FTE数が15増えるごとに1件追加して行き、110を越すと以後FTE数

が50増えるごとに1件追加という決まりに変更になった。その結果、ケンブリッジ大学の臨床医学分野(UoA1)のように前回のFTE数が192.05で事例研究提出が20件であったのに対して今回はFTE数が364.43で事例研究提出が14件というように逆転現象が起こっている。表2でインパクト事例数がREF2021ではやや減少しているのはそのような事情によるものである。

今回の最も大きな特徴の一つは、全体のクオリティ・プロファイルの4*と3*に該当する割合がそれぞれ41%、43%と前回の30%、46%から大きく変化したことである。(アウトプットのみでは今回それぞれ36%、47%で、前回は22%、50%)。

	REF2021	REF2014
参加大学数	157	154
成果提出研究者数	76,132	52,061
成果提出数	1,878	1,911
アウトプット数	185,594	191,150
インパクト事例研究数	6,781	6,975
全体としての4*の割合	41% (36%)	30% (22%)
全体としての3*の割合	43% (47%)	46% (50%)
UoA (Unit of Assessment) の数	34	36
評価パネル参加者数	900	898
インパクト評価に関わるユーザー数	220	259

4*,3*()内はアウトプットの割合

表2. REF2021とREF2014における各指標の違い

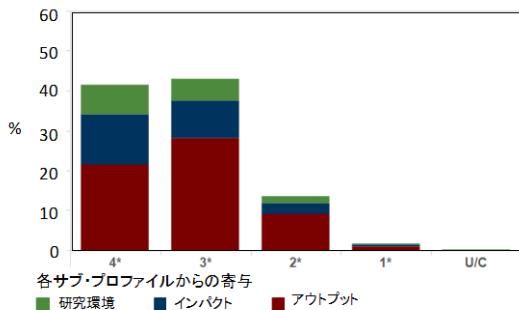
次ページの図1はアウトプット、インパクト、研究環境のそれぞれのクオリティ・プロファイル(サブ・プロファイル)の割合の値と全体への寄与を示したものである。全体のプロファイルは、アウトプット、インパクト、研究環境のそれぞれに評価の重み(60%、25%、15%)を乗じて足し合わせたものである。また、下部に示す表には比較のためにREF2014の値も括弧の中に記してある。なお、提出成果についてはFTE数の重みづけもなされている。これを見るとそれぞれの評価領域で4*が 大きく増加していることが分かる。それに伴い、3*以下の割合が減少しており、全体的に上方にシフトしている。

特にインパクトと研究環境はそれぞれ4*が前回より4~5%増えてほぼ50%であり、提出された成果の半分が最優秀であるということである。この理由の一つとして、前回初めてインパクトと研究環境の評価が行われたのに対して、今回は前回の学習効果が発揮されたということが挙げられるだろう。ただし、インパクトに関してはその成果が多様であり、また評価も主観要素が多く含まれることを考えると、どのような成果が最優秀なのかは今

英国学術調査報告

後も論議を呼ぶことになろう。

それと比べてアウトプットはより客観性が高いことも含め、4*が前回より14%も増加して36%になったことは注目に値する。確かにこれにより英国大学の研究力が増加したと解釈できないこともないが、前回に比べて成果提出者数が1.5倍に増えているのにも関わらず提出成果数が3%ほど減少していることは、各自が研究成果をよいものに絞って提出した結果とも考えられるので、前回との単純な比較は困難であろう。なお、今回の改正で成果数の少ない小規模大学の評価が上がったという報告もあり、一つの改善点と言えるであろう。



	4*	3*	2*	1*	UC
全体	41 (30)	43 (46)	14 (20)	2 (3)	0 (1)
アウトプット	35.9 (22)	46.8 (50)	15.4 (24)	1.6 (4)	0.3 (1)
インパクト	49.7 (44)	37.5 (40)	10.8 (13)	1.7 (2)	0.3 (1)
研究環境	49.6 (45)	36.9 (40)	11.6 (13)	1.9 (2)	0.0 (0)

図1. 全体への各サブプロファイルの寄与。表の値は%で、括弧内はREF2014の値。(UCはUnclassifiedの略。)

3. REF2021の結果

REF2021の結果は、2022年5月12日に発表された。各大学は、ウェブサイト上でその大学の誇るべき成果について詳しく公表を行っている。全体の傾向としては、前述のように今まで評価が高くなかった小規模大学が評価を上げたり、中堅大学でも大幅に順位を上げた大学がある。その一方で、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学、UCL、インペリアル・カレッジ・ロンドン等のいわゆるゴールデン・トライアングルの大学は、評価は相変わらず高いものの、評価に基づいて配分される研究助成金専有率は減ることとなった。

表3に上位6大学の評価結果を示す([3]を参考に構成)。GPA (Grade Point Average) とは、その大学の4*、3*、2*、1*の割合(%)にそれぞれ4、3、2、1を乗じ、それらの和を100で割った

値である。また研究力 (Research Power) とは GPA に FTE 研究者数を乗じたもの (最大のオックスフォード大学の FTE 数 3404.62 に GPA を乗じた値を 1,000 として正規化) である。この結果を見ると、研究力に関してはオックスフォード大学、UCL、ケンブリッジ大学等のように大規模で GPA が高い大学が上位を占めている。ただし、GPA だけに着目すると、Imperial College London (研究力 9 位) が第 1 位で、London School of Economics and Political Science (LSE) (研究力 33 位) が第 3 位である等、中小規模大学が上位に入っている。また、特にマンチェスター大学は GPA の順位を REF2014 に比べてかなり (17 位 → 8 位) 上げており、健闘の結果がよく表れている。

大学名	UoA の数	研究力 順位	研究力	GPA 順位	GPA	GPA 2014 順位	GPA 2014
オックスフォード大学	31	1	1,000	7	3.49	4	3.34
UCL	32	2	935	6	3.50	8	3.22
ケンブリッジ大学	30	3	846	3	3.53	5	3.33
エディンバラ大学	28	4	737	15	3.42	11	3.18
マンチェスター大学	31	5	620	8	3.47	17	3.16
キングス・カレッジ・ロンドン	25	6	547	9	3.46	7	3.23

表3. 研究力およびGPAで示されたREF2021の上位6大学の結果

次ページ左段の図2に示すのは、評価結果の例として上記の表3に示された上位4大学の2つのUoA (臨床医学と英語学・英文学)における全プロファイル及びアウトプット、インパクト、研究環境の各プロファイルの分布を示したものである。プロファイルの棒線グラフは、左から4*、3*、2*、1*の順に並んでいる。また、4種類の色の円で囲まれた部分は、際立った卓越性を示している領域である。臨床医学の分野では、ケンブリッジ大学のアウトプット及びインパクトは特に高い卓越性を示している。因みにこの分野のFTE数は、オックスフォード大学が498.02で最も多く、次いでケンブリッジ大学が364.43、エディンバラ大学が357.12、UCLが344.18と押し並べて高い数字を示しており、各大学がこの分野に相当力を注いでいることがわかる。一方、英語学・英文学の分野ではエディンバラ大学の成果が際立っている。

英国学術調査報告

特にこの分野でオックスフォード大学、ケンブリッジ大学がそれぞれ116.00、104.00のFTE数を示しているのに対して、同大学のFTE数は半分以下の46.7であり、少数精鋭の様子がよくわかる。

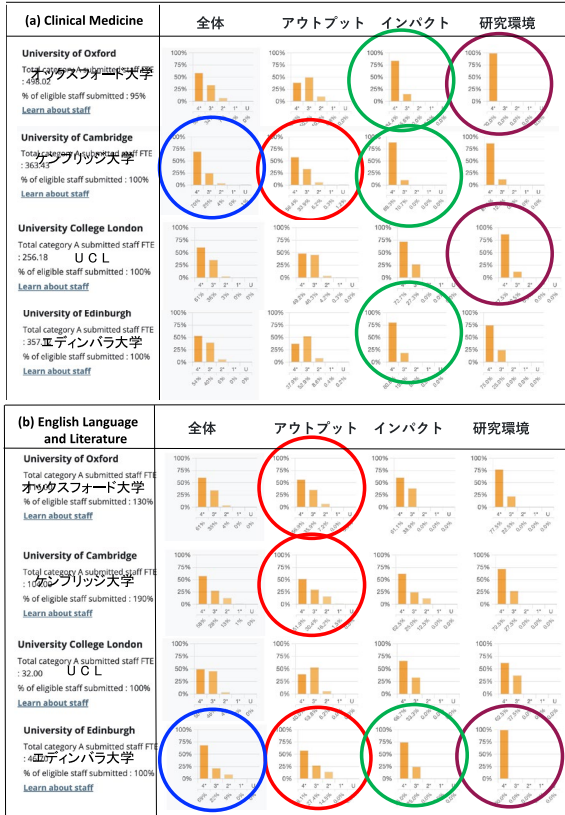


図2. 上位4大学のクオリティ・プロフィールの分布。(a)臨床医学、(b)英語学・英文学。

表4には、全分野で提出されたアウトプットの形式の種類と件数、パネルA～Dの各メイン・パネルでの同様の件数を示す。これによるとパネルA(生命科学)とパネルB(理工学)ではほぼ100%が論文の形式であるのに対して、パネルC(社会科学)は全体の約83%が論文、約17%が著書である。また、パネルD(人文科学)ではこの比率が逆転し、約34%が論文、約55%が著書である。なお、同分野ではアウトプットの展示・公演も3%の割合を示している。一例として、芸術分野での公演(Performance)のアウトプットにShakespeareに関連したものが全大学から4件示されている。

具体的なアウトプットの例を紹介したい。「BREXIT(EU離脱)」をキーワードとしてこれに関連した論文の総数は296件で、その

アウトプットの形式	全体	パネルA (生命科学)	パネルB (理工学)	パネルC (社会科学)	パネルD (人文科学)
論文	152,442	48,797	45,006	46,874	11,765
著書	28,726	38	132	9,374	19,182
制作物	400	0	2	3	395
展示・公演	1,140	0	1	9	1,130
デジタル制作物	542	3	3	30	506
その他の著書	1,067	69	25	411	562
その他	1,365	2	1	37	1,325
総提出件数	185,594	48,872	45,153	56,649	34,920
UoAの数	34	6	6	12	10

表4. 提出されたアウトプットの形式。数字はアウトプットの件数。

うち政治学及び国際研究分野の論文数は55件であった。前述の4大学からの論文数が10件あり、そのリストを次ページ上段の表5に示す。この表は発表年の古いものから順に上から示しているが、最初の論文はBREXITが決定された翌年に発表されている。これらの論文タイトルを見るとBREXIT前後の国民や政府の政治的対応に関する論文が多いが、最近ではさらにBREXITの効果や影響を検証した論文が多く発表されている。なお、政治学分野以外では、法律分野で76件、ビジネス分野で36件、経済学分野で4件の発表が見られた。

次にインパクトの例を紹介する。インパクトは前述のように社会・経済・文化等にどのような便益をもたらしたかが評価の焦点になるが、提出されたインパクトがどのような効果や影響を及ぼしたか、そのインパクト・タイプと対応する件数を全分野及び4パネルのそれぞれで示したのが次ページ左段の表6である。このインパクト・タイプのカテゴリーの分類は評価側でなされたものであり、提出者の判断ではない。これを見ると全分野で最も大きな影響を及ぼしたのが社会領域(全体の39%)であり、続いて技術領域(同18%)、文化領域(同15%)と続く。ただし研究分野によって大きく異なり、パネルA(生命科学)では健康分野、パネルB(理工学)では技術分野、パネルC(社会科学)では社会分野、パネルD(人文科学)では文化分野の件数が最大となっている。

英国学術調査報告

	大学	タイトル	ジャーナル
1	ケンブリッジ大学	How the City of London lost at Brexit : a historical perspective (ロンドンの敗北)	Economy and Society (2017)
2	オックスフォード大学	Mutual recognition: Promise and denial, from Sapiens to Brexit (サピエンスからBREXITへ)	Current Legal Problems (2017)
3	ケンブリッジ大学	Inevitability and contingency: The political economy of Brexit (BREXITの政治経済)	British Journal of Politics and International Relations (2017)
4	エディンバラ大学	How Brexit was made in England (イングランドのBREXIT)	British Journal of Politics and International Relations (2017)
5	エディンバラ大学	For Whom the Bell Tolls: Shifting Troll Behaviour in the Twitter Brexit Debate (TwitterでのBREXITの議論)	JCMS: Journal of Common Market Studies (2019)
6	オックスフォード大学	Divided by the vote: affective polarization in the wake of the Brexit referendum (BREXITの国民投票)	British Journal of Political Science (2020)
7	ケンブリッジ大学	When Planets Collide: The British Conservative Party and the Discordant Goals of Delivering Brexit and Preserving the Domestic Union, 2016–2019 (保守党: BREXITと国内的和合)	Political Studies (2020)
8	UCL	A Populist Paradox? How Brexit Softened Anti-Immigration Attitudes (BREXITと反移民的態度)	British Journal of Political Science (2020)
9	エディンバラ大学	Negotiating Brexit : The cultural sources of British hard bargaining (BREXITの交渉・強行方針の文化的原因)	JCMS: Journal of Common Market Studies (2020)
10	エディンバラ大学	Analysing vote choice in a multinational state : National identity and territorial differentiation in the 2016 Brexit vote (BREXIT投票行動)	Regional Studies (2020)

表5. 4大学から発表された「BREXIT」に関連した論文例

インパクトのタイプ	全体	パネルA (生命科学)	パネルB (理工学)	パネルC (社会科学)	パネルD (人文学)
社会	2,469	316	169	1,356	628
技術	1,124	227	791	84	22
文化	940	5	24	95	816
健康	845	690	73	66	16
環境	464	129	169	152	14
経済	203	5	19	173	6
法律	171	21	10	125	15
政治	145	36	13	95	11
総提出件数	6,361	1,419	1,268	2,146	1,528
UoAの数	34	6	6	12	10

表6. 提出されたインパクトのタイプ。数字はインパクトの件数

次ページ上段の表7に示すのは「Net Zero」というキーワードに関連した4大学のインパクトの事例7件である。英国では2021年にグラスゴーでCOP26(第26回気候変動枠組条約締結国会議)が開催されたが、それに先立ち2020年11月には「グリーン産業革命」が、2021年10月には「ネットゼロ戦略」が発表される等、英国は欧州の中でも気候変動に対する取組みが進んでいる国の一つである。「Net Zero」というキーワードに関連したインパクト事例を調べると、全体では120件あり、主要な分野として工学分野30件、環境分野20件、地理分野11件、化学分野6件、生物学分野6件、物理学分野4件等がある。インパクト事例の提

示ではそのインパクトが達成されたことが明らかなエビデンスを必ず示さなければならない。表7を見ると工学系のインパクトは経済やビジネスへの効果が明らかであるが、それ以外では政策や制度、国際協力への貢献等インパクトの影響は多様である。特に7行目のエディンバラ大学の“Carbon Capture and Storage including Negative Emissions to deliver UK Net Zero Emissions”はそのベースとなる研究論文が2014年に発表されており、そのインパクトは2050年までに温室効果ガス排出量をネット・ゼロ(正味ゼロ)にすることを決めた2019年の気候変動法(Climate Change Act)改正に大きな影響を及ぼしたとされ、大きな成果と言えよう。

4. REF2021の効果

英国の大学にとって、REFは大きなプレッシャーではあるが、どの大学もこれを戦略的に活用して、研究助成資金の増加、研究成果の宣伝、学内の卓越研究の鼓舞、高い研究成果やインパクトの目標設定等を通して自らの研究力の増強を図っているようである。

特にREF2021は研究のインパクトの評価を行うようになって2回目の体系的な研究評価であるが、そのために各大学は相当な工夫をしてきたようである。例えばUCLでは、研究担当副学

英国学術調査報告

大学	分野	タイトル	内容	
1	オックスフォード大学	環境	Assessing Routes to Greenhouse Gas Removal: informing UK Government Net Zero Targets & Actions	大気からの温室効果ガス除去(GGR)。政府に2050年のネットゼロ目標を推奨。GGRの国際的認識向上に貢献。
2	オックスフォード大学	環境技術	Reducing the risk of top seal failure and leakage from hydrocarbon accumulations or carbon dioxide storage sites	地下貯留層からの炭化水素の漏出の評価と抑制。主要国際企業探査プロセス投資を100万ポンド節約。
3	ケンブリッジ大学	工学	Recycling inert gases in manufacturing processes	シリコンウェーハ用の不活性ガス洗浄・リサイクルデバイス開発。企業GR2Lは2017年以来620万ポンドの収益。
4	UCL	工学	Research into new maritime structures and systems exploited in novel designs	船舶設計改善研究。安全性、快適性、安定性、性能向上。470万ユーロ相当の合金と製造コストを節約。
5	エディンバラ大学	環境	Detection of the human fingerprint in observed climate change and extremes underpins the Paris agreement on climate change and resulting policies worldwide	極端な気象イベントに対する人為的影響の定量化。政府間パネル(IPCC)報告への貢献。米国立アカデミーの2016年報告に影響。
6	エディンバラ大学	環境	Supporting UN Paris Agreement commitments by estimating global terrestrial C fluxes from satellite data	世界陸域炭素フラックスを推定し、国連パリ協定を支援。英国宇宙局開発のCO ₂ 監視ビジネスに直接貢献。
7	エディンバラ大学	環境	Carbon Capture and Storage including Negative Emissions to deliver UK Net Zero Emissions	炭素回収貯留(CCS)と負の排出(大気からのCO ₂ 除去)。4つのCCS産業クラスターを開発。持続的投資誘因。

表 7. 4大学から発表された「Net Zero」に関連したインパクトの事例

長の下に“UCL REF Team”が作られており、4分野に対応したそれぞれのチームがアウトプットの提出を支援するが、これと並行して“UCL Research Impact Curation & Support (RIGS) team”という別チームが作られている。Curationとは「専門的な知識を使用して情報等を選択、編成及び提示すること」を指すが、このチームはUCLでの研究から生じるインパクトとなり得るものをモニターし、REFのインパクト・ケーススタディの申請準備を支援している。また、そのための専門的な職員を常に確保するようにしており、大学としての組織的なコミットメントが発揮されている[4]。

また、研究者(マネジメント層を含む)側では、一部でREFを積極的に研究水準や研究収入向上等に活用するという側面から評価するとの声がある一方、研究の本来のあり方の面から批判する向きもある。その中での大きな懸念は、「研究の新規性(novelty)」や「研究の真正性(authenticity)」を阻害する可能性である。新規性に関しては、研究方向が研究成果の出やすいテーマに傾きがちになり、挑戦的課題への取組みが弱くなるという点が大きいだろう。一方、真正性とは、主として研究コミュニティから得られる信頼性を指すが、それが短期的成果を求められるために十分達成されないことを示している[5、6]。

5. 終わりに

REFIについては、最初のRAE実施(1986年)から、35年以上が

経過しており、すでに研究評価として定着していると言える。さらに、評価方法の不断の改善を行っていることは高く評価すべきであろう。特に政府筋では、助成金配分、説明責任、大学の社会的責任等を明らかにするというREFの目的は概ね達成されていると評価されている。また、大学当局はREFを活用して大学の収入増加、名声の向上、改革推進、優秀な研究者の招へい・確保等へ積極的に活用する動きが見られる。種々の賛否はあるが、REFが英国大学の研究水準向上に一定の効果を発揮していることは確実であろう。

参考文献

- [1] REF2021ウェブサイト: <https://www.ref.ac.uk/>
- [2] REF2014ウェブサイト: <https://www.ref.ac.uk/2014/>
- [3] “REF2021: NEWS”, 12 MAY 2022 Times Higher Education; p.9 <https://flipbooks.timeshighereducation.com/19712/72961/index.html?3604>
- [4] UCL ウェブサイト: “How UCL supports impact”, <https://www.ucl.ac.uk/impact/how-ucl-supports-impact>
- [5] “The Real-Time REF Review” <https://eprints.whiterose.ac.uk/147915/>
- [6] “Understanding perceptions of the Research Excellence Framework among UK researchers” The Real-Time REF Review https://www.rand.org/pubs/research_reports/RRA1278-1.html

EUの研究助成プログラム「Horizon Europe」への 英国の参加を巡る動向について

ロンドン研究連絡センター・アドバイザー
津澤 希

Point

- 英国は、2020年1月にEUを離脱したが、EUの研究助成プログラムである「Horizon Europe」への英国の参加に関しては、現在もEUと英国の間で議論が続いている。
- その背景には、EUと英国の間で交わされた「北アイルランド議定書」を巡る問題があり、「Horizon Europe」への参加ができないことにより、英国の研究者への影響も出てきている。
- 「Horizon Europe」には、気候変動やデジタル、グリーン分野などグローバルな研究・イノベーション活動に係る取組みも含まれており、欧州の研究ネットワーク確保の観点からも英国が参加することに意義があるため、引き続き英国とEUの動向が注目される。

Introduction

英国は、2020年1月にEUを正式に離脱した。EU離脱により想定される英国の学術界への影響に関しては、過去のNews Letter の当欄でも取り上げているのでそちらを参照されたい(注1)。英国のEU離脱から2年以上が経過した2022年9月現在まで、EUの研究開発・イノベーションのための研究助成プログラムであり、特に予算が大きく、英国の研究者にとって欧州の研究ネットワークへのアクセス確保に重要な「Horizon Europe」への英国の参加に関しては、EUと英国の間で議論が行われてきた。本稿では、このHorizon Europe プログラムへの英国の参加を巡る最近の動向及び状況に焦点を当て、今後の見通しとともにまとめてみた。

1. EUによる研究助成プログラム「Horizon Europe」

Horizon Europe は、現在、EUによる研究開発・イノベーションのための研究資金助成プログラムとして実施されており、欧州と世界の頭脳を結集し、現代の重要な課題に対して、EUの政策優先事項を支援するとともに、欧州の次世代のためのよりよ

い未来を築くことを目的として、2021年6月に公募が開始された。本プログラムに参加することは、欧州の研究ネットワークへのアクセスを確保し、優秀な人材の獲得や連携・協力の促進などに資する観点からも、欧州各国にとって重要なプログラムであると考えられる。

Horizon Europe の主要部分は、「卓越した科学」、「グローバル・チャレンジ・欧州の産業競争力」、「イノベティブヨーロッパ」という3本の柱で構成されており、EUが重要視する気候変動やデジタル、グリーン分野といった、グローバルな研究・イノベーション活動に係る取組みも含まれている。また、予算総額は、2021年から2027年までの7年間で総額€955億を配分する計画となっている(注2~4)。これは、2014年から2020年までの7年間にわたり、総額€800億という予算規模で実施された前計画である「Horizon2020」の後継プログラムである。なお、Horizon2020 において、英国はEUの加盟国として初年度から参加しており、ドイツに次ぐ2番目に多い助成額を受け取ってきた。(注5)

2. 英国のEU離脱に伴うHorizon Europe の取り扱い

以上がHorizon Europe についての概論であるが、英国のEU離脱に際し、当初、英国のHorizon Europe への参加はどのように扱われていたのだろうか。

まず、Horizon Europe の前計画である、Horizon2020 に係る英国のEU離脱後の取り扱いについてである。過去のNews Letter (注1)でも述べられている通り、Horizon2020 に関しては、EUと英国との間で協定が締結され、個々の研究者等が参画しているプログラムに関しては、プログラム終了まで引き続き助成金を受け取ることができ、また、英国の研究者や企業等も引き続き参加・申請が可能であった。

一方、Horizon2020 の後継プログラムとして、2021年から開始されたHorizon Europe に関しては状況が異なっていた。少し古いのが、2018年7月に英国が公表した「英国とEUとの将来の関係に関する白書」(注6)において、英国は、Horizon Europe などのEUの研究助成プログラムへの継続参加について、EUと協議し準加盟国として合意することを求めている。他方、EU側は、「英国は日本やカナダ等、EU外の『第三国』としての参画しか認めない」との姿勢があり、議論が続いていた。(注7から8)

こうした状況の中、2020年末には、英国がEU離脱においてEUとの間で合意した取り決めである協力協定が発表された(注9)。その合意によると、英国はHorizon2020 に引き続き、資金を拠出することによってHorizon Europe に参加することができるとしている。これにより、EUの研究助成に係る英国の参加についての不確実性は解消されたが、公式に参加するためには、英国がさらなる交渉を行い、最終的な合意を行うように委ねられている。これまでの曖昧な状況に比して、この協定が合意に至ったことは、英国で研究を行う科学者たちにとっては歓迎されたかもしれない。

しかしながら、その後も英国とEUとの議論は平行線を辿っており、結果として、英国はHorizon Europe への最終的な参加には至っていない。何が問題となっているのか。大きな障壁となっているのは、2019年に英国とEUとの間で交わされた「北アイルランド議定書」を巡る問題が解決されていないことである。北アイルランドとアイルランドは、英国とEUが唯一国境を接している地域であるが、英国のEU離脱以前は英国もアイルランドもEUの貿易ルールに従っていたため、国境を越えて物資を輸送

することは簡単であった。これが、英国のEU離脱後には新しいシステムが必要となり、例えば、EUは食品に関する厳しい規定があり、非加盟国からの物資の輸送には国境での検査が必要である。現状では、これらの検査やチェック体制の規則に関し、英国とEU側の間で合意が得られていないという状況が、英国がHorizon Europe に参加できていない問題の背景となっている。(注10)

そのような状況の中、2021年6月にHorizon Europe の公募は開始された。2020年末の協力協定で、英国はHorizon Europe への参加に合意したため、英国の研究者たちはそのように批准されると仮定してHorizon Europe に申請することはできる。しかし、北アイルランド議定書を巡る問題により、参加の最終合意には至っていないため、実際にHorizon Europe の研究助成が決まり、研究助成金の契約締結時までに英国の参加がEUとの間で最終的に締結されていない場合、独自の資金源を探さなければいけない状況となった。

すなわち、Horizon Europe への英国の参加が決まらないことにより、欧州からの研究助成金が支給されず、研究の中止や撤退、研究者の雇用など、英国の研究者に大きな影響を及ぼす可能性が出てきた。(注11)

以上が、英国のEU離脱に伴うHorizon Europe の取り扱いとその影響についてであるが、現時点(2022年9月時点)においても、Horizon Europe への英国の参加について英国とEUとの間で議論が続いている。特に、2022年からは、英国在住の研究者のHorizon Europe による研究助成金の受給資格に係る動向が英国の報道で多く取り上げられているので、次項では、これらの状況及び各方面の反応を紹介したい。



3. 「Horizon Europe」にかかる最近の動向

本項では、Horizon Europe に関係する最近の動向及び各方面の反応を紹介する。

(1) 大学・研究機関

Horizon Europe に英国が参加することに関しては、英国の大学や研究機関にとっても研究上の大きな影響を受けることが考えられる。

例えば、英国大学協会(UUK)は、英国のHorizon Europe への参加を巡る議論に対して早急な解決を求めており、英国とEU間の研究計画の将来が危機に瀕していると警告している。また、UUKからEUに対する書簡の中で、「不確実性が長引く中、状況は日増しに悪化している。英国のHorizon Europe への参加が失敗となれば、欧州のみならず、その他の地域でも将来の世代に不利益をもたらすであろう。」と書いている等、Horizon Europe からの撤退の可能性を警告している。(注12)

研究集約型の大学グループである、ラッセルグループの政策担当者であるJo Burton氏は「我々が望んでいることは、研究者が引き続きHorizon Europe に参加し、資金提供を受けられるという保証を得ることである。」と語っている。(注13)

(2) 欧州

一方、欧州(EU)側は、2022年4月、欧州研究会議(ERC)の2021年以降の助成金受給対象者で、英国在住の研究者に対し、受給資格を維持したいのであれば、英国を離れてEU在住者となるか、英国に留まり助成金を諦めるかのいずれかを選択するよう、書簡で通知した。(注14)

ERCは、EUにおける基礎研究の主要な資金提供機関であり、その予算はHorizon Europe の一部となっている。また、ERCからの助成金は、EU加盟国またはHorizon Europeの参加国に割り当てられる必要がある。

対象者は、ERCからの助成金を受け取るためにEUに居住するか、英国に留まるかの苦渋の選択に直面したが、2022年6月末の期限を受け、約150人のうち19人が、ERCからの助成金の受

給を維持するために、英国を離れてEUに居住することを決定したと発表された。これにより、英国を拠点としていた19人の研究者の助成金は、EUの受け入れ機関に移管されることとなった。(注15)

(3) 政府

次に、英国政府側の動きである。ビジネス・エネルギー、産業戦略省(BEIS)は、英国のHorizon Europe への参加が遅れる中、申請者に対して新たな資金保証を提示している。これは、Horizon Europe による助成金提供を勝ち取ったものの、EU側との参加の最終合意ができていないことにより、資金を調達できない申請者を対象としたものである。この保証は、英国の非省庁の公的機関であるUKリサーチ・イノベーション(UKRI)を通じて提供される。(注16)

すなわち、英国に留まる場合、ERCの助成金を諦めることとなり、研究への影響を受けるが、その場合、UKRIを通じて英国政府による資金提供が保証されることとなる。このように、英国政府は、Horizon Europe の資金を失う英国在住の研究者に対して、代替となる同様の資金提供を保証する計画を打ち出している。しかし、ERCの助成金のような名声のあるものに匹敵するののかという疑問も生じており、また、その保証計画をあまり権威のない選択肢と見なしている者もいる。(注15)(注17)

英国政府によるHorizon Europe の代替となる政策が打ち出されている中、2022年7月には、Boris Johnson 首相が退陣に追い込まれた。これにより、北アイルランド議定書に係るEUとの交渉がすぐに進むとは考えにくくなり、Horizon Europe への参加交渉にもますます支障をきたすようになった。

また、Horizon Europe の代替となる資金保証政策も、次期首相のLiz Truss氏に委ねられ、今後の見通しがますます不透明になってきた。(注18)

4. 結びに

以上、Horizon Europe を巡る英国の動向等について通覧してみたが、英国のEU離脱以降、現在に至るまでEUとの議論が続いており、英国のHorizon Europe への参加については解決に至っていない。

このような状況が続けば、研究者の国外流出、研究の中止や撤退、研究費の不足など、研究に関する様々な影響が出てくることが予想される。このことは、英国のみならず、欧州全体の研究界にとっても好ましくないものであると考えられる。英国の参加の障壁となっている、北アイルランド議定書を巡る問題についても、この解決により得られる利益がどのようなものであれ、欧州、さらには世界最大規模の研究助成プログラムであるHorizon Europe への参加に勝る利益はないとの声もある。また、研究の中心を担う大学や研究機関にとっては、政治的な背景による問題は科学と切り離すべきとの意見もある。

前計画のHorizon2020 への参加に見られるように、英国はこれまで、EUから供給される資金を積極的に活用し、EUの中で研究プロジェクトを実施してきたことにより、研究活動を拡大し、学術的發展を享受してきた。EU離脱とともにEUの研究プログラムへの参加を終わらせるのではなく、引き続き欧州間の研究ネットワークを確保し、気候変動やデジタル、グリーン分野といった重要政策分野の研究活動に取り組む観点からも、英国が参加する意義は大きいと考える。

Boris Johnson 首相が辞任し、2022年9月には新たにLiz Truss新首相が就任したことで、英国は政治的にも大きな局面を迎えており、Horizon Europe への参加に向けた交渉、あるいは、代替する英国内の資金保証政策を確実に実施することが期待される。最終的にどのような結論となるのか、現段階では不明だが、引き続き英国とEUの動きを注視する必要がある。

参考

注1 JSPS London News Letter Vol.63

https://www.jsps.org/newsletter/JSPSNL_63.pdf#page=11

注2 2020年12月21日 JST研究開発戦略センター

<https://www.jst.go.jp/crds/pdf/2020/FU/EU20201221.pdf>

注3 2021年8月4日 EU MAG

<https://eumag.jp/news/h080521/>

注4 European CommissionによるHorizon Europeの概要

https://ec.europa.eu/info/funding-tenders/find-funding/eu-funding-programmes/horizon-europe_en

注5 2020年2月4日 ビジネス・エネルギー・産業戦略省の発表によるデータ

<https://www.gov.uk/government/statistics/uk-participation-in-horizon-2020-september-2018>

注6 2018年7月12日 英国とEUとの将来の関係に関する白書

<https://www.gov.uk/government/publications/the-future-relationship-between-the-united-kingdom-and-the-european-union>

注7 2020年1月9日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/framework-programmes/news/memo-london-no-cherry-picking-over-horizon-europe-membership-rd>

注8 2020年1月28日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/brexit-negotiators-should-aim-standalone-deal-research>

注9 2020年12月30日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/framework-programmes/news/uk-eu-research-deal-glance>

注10 2022年5月18日 BBC News Japan

<https://www.bbc.com/japanese/features-and-analysis-61488832>

注11 2021年10月21日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/researchers-go-unpaid-delay-uk-association-horizon-europe-starts-bite>

注12 2022年6月22日 UUKが発表した記事

<https://www.universitiesuk.ac.uk/latest/news/universities-uk-calls-urgent-resolution>

注13 2022年7月21日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/uk-publishes-details-plan-b-alternative-horizon-europe>

注14 2022年4月12日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/erc-issues-ultimatum-telling-150-uk-based-grant-holders-move-eu>

注15 2022年6月30日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/european-research-council-withdraws-grants-115-researchers-based-uk-19-scientists-decide>

注16 2021年11月29日 ビジネス・エネルギー・産業戦略省の発表

<https://www.gov.uk/government/news/uk-government-provides-financial-safety-net-for-horizon-europe-applicants>

注17 2022年6月9日 Research Professional Newsの記事

<https://www.researchprofessionalnews.com/rr-news-uk-politics-2022-6-143-uk-based-erc-winners-told-their-grants-will-be-terminated/>

注18 2022年7月7日 Science Businessの記事

<https://sciencebusiness.net/news/uk-position-horizon-europe-air-government-implodes-and-science-minister-resigns>

在英研究者の 者窓から

第27回 Shakespeare Institute, University of Birmingham 千葉 治紫夏



Dr Jessica CHIBA

PhD, MA, BA (hons)
Leverhulme Early Career Fellowship at Shakespeare Institute,
University of Birmingham

Biography

- 2009-2012 BA (hons) in English with Philosophy, Royal Holloway, University of London
- 2012-2013 MA in Shakespeare, Royal Holloway, University of London
- 2013-2017 PhD, 'Shakespeare's Ontology', Royal Holloway, University of London
- 2017-2020 Teaching Fellow in Early Modern Literature, Royal Holloway University of London
- 2020-Present Leverhulme Early Career Fellowship at Shakespeare Institute, University of Birmingham

My name is Dr Jessica Chiba, Leverhulme Early Career Fellow at the Shakespeare Institute, University of Birmingham. My research interests are in Shakespeare, philosophy and translation, and I completed my PhD at Royal Holloway, University of London in 2017 with a thesis entitled 'Shakespeare's Ontology', which was a philosophical examination of the ways in which Shakespeare presents human existence. My current research project, 'Shakespeare's Untranslatability', explores how the philosophical foundations of Shakespeare's writing and thinking can be revealed by examining words, concepts and linguistic structures that cannot be translated into Japanese. As a junior scholar, I am honoured to have been asked to write this column.

Born to a Japanese mother and English father in London, I returned to Japan aged 3, and spent my childhood there, where my mother's great effort ensured I was given a bilingual education. When I was 10, I moved to Spain, and then at 13 to England to finish my compulsory education. With some vague notion that I ought to make use of my linguistic skills, at 18 I returned to Japan, enrolling in a short course at Doshisha University to brush up my Japanese. As much as I enjoyed this experience, I realised that I wished to study English Literature, and as it is undoubtedly one of the best places to study the subject, I returned to England and started my degree in English with Philosophy at Royal Holloway, University of London. The rather tumultuous education I received, changing schools to keep up my language skills and living in

different countries, may not have been the strongest foundation for an academic life, but what it lacked in formality it made up for in variety and experience. Growing up bilingual in both countries, I did not encounter many of the challenges Japanese students face in first leaving Japan, but even my experience was not without its cultural shocks. It has certainly taken me years to understand when English people are joking! But I love the meritocratic academic world, the intellectual freedom, and the camaraderie of my colleagues in this country.

From my meandering biography, it may be clear that I did not become an academic out of any single-minded pursuit of the goal. It was only when I graduated top of my undergraduate cohort that I realised this might be the path for me. But the decision was not a simple question of academic ability and fit. Part of the benefit of the English education system is that there is freedom to explore possibilities, and I was blessed with mentors who guided me at Royal Holloway, both in the English and Philosophy departments. These people gave me the opportunity to realise my potential, but also to understand the broader importance of the arts and humanities, and study as a way of life rather than the means to acquiring a qualification. While theoretical subjects are sometimes treated as secondary or even useless in comparison with the wonderful areas of research that can make a material difference to the quality of people's lives, my study of literature and philosophy convinced me that the arts and humanities express something

在英研究者の者窓から

crucial to society and human experience. If science and technology help to keep us alive, then the arts and humanities are about what makes that life worth living, about questioning assumptions, and about showing that utility is not the only value that governs our lives.

I entered my MA and PhD studies under the encouragement and supervision of my inspiring mentors, Professor Kiernan Ryan and Professor Andrew Bowie, and graduated with a desire to be to a younger generation discovering the world what my own tutors had been to me. Although I considered the possibility of moving to Japan, or indeed elsewhere in the world, as a specialist in Shakespeare it made sense to remain in England if possible. This is not an easy path, as there are increasingly fewer academic positions available for young scholars in the UK. But I was extremely fortunate. Having taught undergraduate students during my PhD studies, I was employed immediately upon my graduation as a Teaching Fellow at Royal Holloway. As I was not paid to do research in this role, for three years I gained teaching and administration experience, while working on publications in my own time.

I had been focussed purely on philosophy and English during my degrees, and around this time I reconsidered my old feeling that there must be some way in which I could use my biculturality. The result was a research proposal centred on translation that would allow me to use my experience and language skills to find fresh ways of interpreting Shakespeare's work. In 2020, I submitted this proposal and received the Early Career Research Fellowship from the Leverhulme Trust, starting, mid-lockdown at the University of Birmingham's Shakespeare Institute in Stratford-upon-Avon. Lockdown had its unique challenges, among the first of which was that I did not visit my new workplace for over a year after I was employed there, and the fact that I could not conduct any of the research trips to Japan I had planned when I applied for the fellowship. Nevertheless, my time at the University of Birmingham has been nothing short of ideal: surrounded by

Shakespeare specialists, and teaching MA students of all ages from around the world. I am delighted to have been appointed to a permanent position at the Shakespeare Institute, which I will take up upon completion of my fellowship in 2023. I am extremely grateful to have joined such a prestigious community, and hope to use this privilege to benefit the cultures that made me who I am.

As we learn to live with Covid-19 and intercultural exchanges between countries become easier again, I have been developing international projects with scholars in Japan, organising conferences and symposia with Waseda University, and working on the JSPS-funded Asian Shakespeare Intercultural Archive (A|S|I|A) with academics in Singapore and around Asia. I live in hope that I can continue to be a bridge between cultures and languages, fostering international exchange through the mutual appreciation of art that speaks to our humanity.



Dr CHIBA gives a lecture at the Shakespeare Institute



Mason Croft, which now houses the University of Birmingham's Shakespeare Institute

|英国の大学・研究機関紹介

リバプール大学(University of Liverpool)

皆様は、「ビートルズ学」の修士号を取得できる大学が存在することをご存じだろうか。2021年9月、この耳慣れない学問名のコースを新設したのがリバプール大学である。世界中で愛され続ける伝説のバンド、ザ・ビートルズ(The Beatles)の発祥の聖地で、彼らが音楽を中心とするクリエイティブ産業に与えるインパクトや遺産等について掘り下げる学問として多くの注目を集めている。実にユニークだと感じるが、同リバプール市内にある、別大学のリバプール・ホープ大学でも10年近く前に「ビートルズ学」の修士課程が設置されており、英国初というわけではないことにも驚かされた。



大学の象徴的建物 Victoria Buildingは「赤レンガ大学」の由来とされる

■7つの重点研究分野

リバプール大学は1881年に設立された。英国内でラッセルグループ、N8研究パートナーシップ(N8 Research Partnership)¹、さらには赤レンガ大学群(Red Brick University)²に属し、過去9名のノーベル賞受賞者を輩出している研究重点型の大学である。現在は、大学全体で取り組む重点研究領域として、先端材料、感染症、デジタル、個人の健康、歴史・文化遺産、健康社会、気候変動の7つを指定しており、様々な関連研究が進められている。これらの領域は、2022年4月にリバプール市が発表・公表しているイノベーション目論見書で掲げている内容と非常に密接に関連しており、大学と市の強力な研究協力体制が見てとれる。なお、この目論見書では、2030年までに同市の域内総生産額に対する研究開発費への投資比率を5%に引き上げることとしている。(英国政府の研究開発費への投資比率目標が、2027年までに国内総生産の2.4%であることに鑑みても、高い基準目標であると捉えられる。)これに伴う効果として、域内総生産額は約6417億の増加と44,000人の雇用創出等が見込まれており、イノベーションの中心的役割を

担う大学の研究活動に寄せられる期待は大きい。

地元との研究協力以外にも、アストラゼネカ、HSBC、IBM、ネットワーク・レール、ユニリーバ等の英国や世界を代表する企業と協定を締結した上で共同研究を行う等、産学連携の拠点となっている。例えば、ユニリーバとはオックスフォード大学とも共同で、シャンプーや洗剤等の日用品を生産する際の二酸化炭素排出量を削減するために廃棄物から持続可能な原料を開発し、サプライチェーン上のネットゼロ実現に向け貢献している。

■海外に広がるネットワーク

そして、本大学は国際競争力においても非常に優れている。学部生約22,000人のうち4分の1以上は留学生で、171ヶ国に渡り広がる219,000人の同窓ネットワークが強みだ。大学では、中国、インド、米国をはじめとする多くの国の研究機関との協定を締結する等、積極的な国際戦略が推し進められている。中でも2006年に中国の西安交通大学と共同で西安交通リバプール大学を設立し、「XJTLU 2+2」(各大学に2年ずつ在籍し、ダブルディグリー)や「Year in China」(1年の交換留学)といったプログラムを提供しているのは興味深い。また、日本との研究連携にも力を注いでおり、日英大学間連携プログラム(RENKEI)の創立メンバーの一角として、2016年にはワークショップを開催している他、日本の研究機関との共同研究実績を持つ研究者も多く在籍する。

■各種ランキングで高ランク

最後に、各種ランキングにおける本大学の位置を確認しよう。THEとQSの世界大学ランキングでは、それぞれ上位200校以内の常連だ。それに加え、2019年以降、毎年発表されているTHEインパクトランキング(国連のSDGsの枠組みを用いて大学の社会貢献の取り組みを可視化したランキング)の最新2022年版においては、1,406校中88位に位置する。当ランキングのSDGs国際目標17項目ごとの個別評価を見ると、「17[実施手段]持続可能な開発のための実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する」の項目において、首位(同順位に他1校)を獲得している。

また、2022年5月に発表された英国の大学の研究評価REF(Research Excellence Framework)2021では、前回のREF2014から各評価項目の重みづけの比率や成果提出研究者の取り扱い等に変化がある中で単純な比較は難しいが、THEが分析・公表するGPAの順位を33位から25位に上げている。前述の地元都市を含めた国内外の企業や研究機関との連携がしっかりと機能しており、大学としての研究成果へと着実に結びついていると考えられる。

University of Liverpool
<https://www.liverpool.ac.uk/>

(国際協力員 滝沢航平)

1 2007年に設立した、イングランド北部に位置する研究力の高い大学8校で構成するグループ。構成校は、リバプール大学の他にダーラム大学、ランカスター大学、リーズ大学、マンチェスター大学、ニューカッスル大学、シェフィールド大学、ヨーク大学。
 2 19世紀後半から20世紀初頭に英国の主要な産業都市に設立され、その後、勅許状を受けた大学の総称。主要大学としては、リバプール大学の他にバーミンガム大学、マンチェスター大学、リーズ大学、シェフィールド大学、ブリストル大学の6つとされる。

ぽりーさんの英国玉手箱

～ 日本人の素朴な疑問に英国人ぽりーさんが答えます ～



Polly Watson

ロンドンセンターのローカリストッフ。
本コラムを通じ、英国の魅力をお伝え
できれば嬉しいです。

Q 英国のスーパーマーケットについて教えてください。

A

まずは、英国のスーパーマーケット(以下SM)のおおよそをお話ししましょう。激安SMとしてLidl、Aldi、ASDAがあり、中間層SMとしてSainsbury's、Tesco、Morrisons、ちょっとお高め系としてWaitrose、M & S Foodという位置づけになります。その他にも小規模なチェーン店のSMもあり、これらを含めるとかなりたくさんSMがあるので、当然ながら顧客の獲得競争は激しいようです。中間層のTescoが激安SM対抗して、一時期Tesco系激安店としてJacksを運営したのですが、今ではすべて閉鎖され元のTescoに代わりました。これは戦略の失敗例ですね。顧客獲得戦略の一つでもあるのが会員カードです。私がよく利用する“Tesco Club Card”は、会員が買い物をするたびにポイントがたまり、一定額に達すると割引クーポンがもらえます。また、Tescoが提携している企業のピザレストランであったり、動画配信サービス等を割引料金で利用できたりします。多くのSMがそれぞれの会員制度を設けていますので、気になる方はウェブで調べてみてくださいね。

ほとんどのSMは、郊外の大型店から街中にある小さな店舗まで、様々な規模で出店しています。街中にある主要SMのコンビニ系店舗のTesco Express、Sainsbury's Metro、Little Waitrose等では、勤務先からの帰宅時に夕飯用としてReady Meals(材料をオープンに入れるだけなど、調理時間や手間がかからない食事)を提供し、働いている者の強い味方になっていますね。また、大型店であれば、それこそ激しい顧客獲得競争に勝ち抜くべく、何でも手に入るよう品揃え豊富なお店が多いです。ガソリンスタンドや薬局を併設しているお店もあれば、食品の他に衣類、食器、鍋、タオル、文房具、雑誌、カード(誕生日や父の日、母の日、結婚記念日等)、学校の制服、ハロウィーンの仮装用衣装、クリスマスツリーと、取扱商品の幅は実に広いです。さらに、SM独自の低価格携帯電話回線、保険や銀行のサービスま

でもあつたりしますよ。

ところで、COVID-19の前後ではSMでの買い物方法もかなり変わりましたね。COVID-19以前からあつた“Scan as you Shop”は、店内の商品を専用デバイス(もしくは、自身の携帯電話)でスキャンし、商品のバーコードを読み取って、そのまま自分の持参した袋に入れていくシステムですが、COVID-19感染拡大防止の考えが普及を加速させました。ただし、まだ慣れていない人もいるので、各店舗にサポートしてくれる店員を配置していますね。また、ロックダウンで買い物もままならなかった頃、SMの宅配サービスは多くの人が利用し始めましたね。配達料こそかかりますが、私の場合は有料会員としての月会費を支払っても、各種サービスや割引きをお得に活用することで元は十分に取れており、大変重宝しています。

そういえば、英国のSMに関連することで、日本人の方からたまに聞かれる質問があります。日本のSMでレジ係が椅子に座らず長時間立っているのに対し、英国で見かけるレジ係は座っているのはなぜか、というものです。言われてみれば英国ではその通りであり、今回調べてみました。これは労働環境(安全衛生および福祉)規則 1992 (Workplace (Health Safety and Welfare) Regulations 1992.)に基づき、労働時間中には座ることが可能とされています。決して英国の店員さん達は怠けているわけでないですよ。

現在、英国では物価が急上昇し、“Cost of living Crisis”が発生しています。英国の中央銀行であるBank of England は政策金利を0.5%引き上げて1.75%にしたことを発表しましたが、これは6回連続の引き上げで、1995年2月以来27年ぶりの上げ幅だそうです。消費者としては、SMでも節約を心掛ける日々が続きますね。

山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な視点から語る痛快エッセイ ～

第11回 「訛りも原因？ ただの個性なのでは？？？」



山田 泰子

2016年からロンドンセンターに勤務。今夏は暑すぎ！エアコン普及率3%の英国の猛暑では内輪、扇子、扇風機の有難さが身に染みた。

最近、ある日本人作家さんの英訳された本を読んだ。主人公はアラサーで大阪出身。10代の若者も登場し、会話の部分は英国の若者が頻繁に使う単語を使用させることで、若者の会話として表現されていることがわかった。しかし、大阪弁の要素がどういう風に表現されているのかはよくわからなかった。

しかし、偶然にも知人からまさにこの小説の大阪弁訳に関することで情報を得ることになった。その知人はたまたまこの小説の英訳チームの人と話す機会があり、大阪弁の翻訳が話題になったそうだ。マンチェスターの人々が使う独特な英語を使って、大阪弁を表現しようとしたらしい。しかし、あまりにも出すぎると、マンチェスターの若者の話になってしまうので、微妙な調整が必要だったそうだ。そのような表現や細かな調整にはまったく気が付かなかった。

確かに英国といえば、方言や訛りをはじめ、地域によって物の名称や表現が異なる。ロールパン一つをとっても地域それぞれで呼び方が違う。方言や訛りで出身地を推測できることは、初対面ではよいアイスブレイクになるかもしれないと思ったが、残念ながら英国の学術界ではそのような好意的に扱われないようだ。と言うのも、最近読んだ英国学術記事でAccentism(アクセント差別)について書かれていたのを思い出した。英国では昔からAccentismが根深く、研究者間でも差別的な扱いを受けることが多いという。高学歴者は大変上品なクイズイングリッシュ(容認発音Received Pronunciation: RP)を話すことを期待される。例えば、あまり賢そうに聞こえないとされる「バーミンガム訛り」であったり、成金や派手好きという偏見のある「エセックス訛り」は知性が低いと思われる。訛りで話す研究者は博士号を取得した研究者だと思われないうで、周りから発音を矯正される場面が多いということだ。また「北イングランド訛り」で話す人は、志が低く知

的さや教養が欠けるとされ、南イングランド訛りであれば、志が高く知性を身に着けているというステレオタイプがある。



(<http://www.craftbakersweek.co.uk/you-say-cob-i-say-roll/> より)

訛りに関して調べてみると、大学生でも学生生活の中で訛りに悩むことがあるそうで、2人の英国人(それぞれ白人男女)の例を挙げるなら、

“私の大学は、オックスブリッジに入ることができなかった学生が多く進学する大学で、イートン、ハロー校など名門私立校を出ている、大変上品(Posh)な英語を話す学生が多かったです。私自身は普通の公立校を出て、あまりきつくないけどバーミンガム訛りとわかるため、同級生から一緒にプロジェクトを組むことを避けられたことが何度もありました。”

山田さんの徒然なるままに

“ラッセルグループの一つであるイングランド北東部にある私の大学は、ロンドン出身でPoshな話し方をする学生が多く、私のように地元出身の北部訛りで話す人は少数派でした。訛りはセミナーなど学術的な場で嘲笑されたり、批判されることが多く、準備万端で挑んだ討論会でも、内容より訛りに対する他の学生からの視線や嘲笑が気になり、ぶるぶる震えていました。”と言う。ちなみに、この大学の過去5年間の卒業生における北東部出身者の割合はわずか7.8%であった。

このような状況を認知してもらおうと、2018年にAccentism Projectというプロジェクトが立ち上がった。アクセント差別に関する体験談を共有できる場を提供する他、アクセント差別に関する学術論文やニュースをWEB上で公開している。このプロジェクトの共同運営者の一人であるManchester Metropolitan UniversityのRob Drummond准教授は“実際に学術界でどれだけこの問題が広がっているのかははっきり言えないが、そのような差別を受けても我慢して声を上げない人もたくさんいるだろう。そして、これは学術界に限った話ではない。訛りによって話す言葉の意味を全く理解できないということはほぼないので、単に聞き上手になることを学ぶことが解決への一番の近道かもしれません。”と言う。ちなみに、英国の学術界では受け入れられづらいとされる訛りかもしれないが、訛りの特殊性をよい方向に生かしている例もある。苦情を入れようとカスタマーサービスに連絡したとき、スコットランド訛りのオペレーター(おばちゃんっぽい方が尚更いい)が電話口に出てくると、なぜかホッとしてしまう。親近感のあるフレンドリーな対応だと感じ、自然と怒りが収まってしまう。これは私の個人的な意見だけでなく、統計にも表れていることだ。



学術界をはじめ、競争の激しい社会において、男女、民族、年齢、肌の色、など様々な差別に対して国や自治体、各種機関、スポーツ競技イベント等で繰り返し、撲滅を訴えてきている。しかし現実

として、差別のない社会なんて夢のまた夢ではないか。競争のあるところに差別ありなのか。なんとも悲しい。

ところで、知人が教えてくれた、大阪弁に代わるマンチェスターの人々の独特な表現とはどのようなものなのか。ちょっと気になるので、もう一度本を読み返してみよう。マンチェスターの出身といえば、ロックバンド、オアシスのノエルとリアム・ギャラガー兄弟を思い浮かべる。彼らの話し方を想像しながら読んでみて、大阪弁が感じられると嬉しいが。。主人公は女性なんだけど、大丈夫だろうか。

【参考資料】

ACCENTISM:

<https://www.researchprofessionalnews.com/rr-news-uk-universities-2022-5-academics-complain-of-ongoing-accentism-at-uk-universities/>

Accentism Project:

<https://accentism.org/>

北イングランド、南イングランド:

<https://www.easterneye.biz/accent-discrimination-have-profound-negative-social-economic-implications-research/>

学生の事例:

<https://www.theguardian.com/education/2020/oct/24/its-had-a-lasting-impact-students-on-being-bullied-over-their-accent>

Durham University etc:

<https://www.theguardian.com/education/2020/oct/19/students-from-northern-england-facing-toxic-attitude-at-durham-university>

スコットランドのコールセンターの評判:

<https://matinee.co.uk/blog/scottish-accent-call-centres/#:~:text=The%20Scottish%20accent,-Although%20the%20Scottish&text=In%20fact%2C%20there%20has%20been,400%20contact%20centres%20in%20Scotland.>

Oasis- Noel & Liam about Talk Tonight:

<https://www.youtube.com/watch?v=hUTKOJfncQA>

British Accents: Manchester / Mancunian:

<https://www.youtube.com/watch?v=6ffiOaj-Gdg>

Vol.23 Dr Anna Lisa Varri

**Dr Anna Lisa Varri**

UKRI Future Leaders Fellow
School of Physics and Astronomy & School of Mathematics,
University of Edinburgh, Scotland, UK

Biography

○University of Edinburgh
2019 – pres. UKRI Future Leaders Fellow
2015 – 2018 Marie Skłodowska-Curie Fellow, then Research
2012 – 2015 Royal Commission for the Exhibition of 1851 Research Fellow

○Visiting Research Appointments

2018 – 2019 JSPS – Royal Society Fellow — University of Tokyo, Japan
2012 – 2013 The Gruber Foundation – IAU Fellow — Indiana University
Bloomington, IN, United States
2010 – 2011 Fulbright Visiting Graduate Researcher — Drexel University,
Philadelphia, PA, Unites States

○Education

Universita' degli Studi di Milano, Italy
2012 PhD in Theoretical Astrophysics
2008 MSc in Theoretical Physics
2005 BSc in Physics

My experience with the JSPS Postdoctoral Fellowship programme has been extremely positive, and I am delighted to have the opportunity to offer some highlights of the very exciting year I have spent in Tokyo, from December 2018 to November 2019.

I am a mathematical astrophysicist and I study the motion of stars and galaxies to understand how they formed and how they will evolve. I develop mathematical models and computer simulations of stellar systems, which I then confront with astronomical data. My research interests are in stellar dynamics, a field at the interface between astronomy, physics, and applied mathematics. I specialise in the dynamics of collisional stellar systems, such as star clusters and galactic nuclei, which I study with analytical, numerical, and observational approaches. Specifically, my JSPS programme was devoted to investigating, by means of mathematical models and numerical simulations, the possible connection between “kinematic complexity” and central black holes in dense stellar systems. I was generously hosted by the Department of Astronomy at the University of Tokyo, under the sponsorship of Professor Michiko Fujii and her research group. Professor Fujii is an international expert in computational astrophysics, and the very first woman to ever join the Astronomy faculty at the University of Tokyo in 2016.

The highlight of my year as a JSPS Fellow has certainly been the opportunity to take part in the “JSPS Science Dialogue” Programme, which allowed me to visit the Urawa Akenohoshi

Girls' Senior High School in Saitama. My main contact, Mr Eiji Takano, the Chief of Science at the school, offered me great freedom in choosing both content and format. Eventually, I decided to offer a frontal lecture, mixing topics of cutting-edge research, interactive questions on basic Physics concepts, my personal and professional story, and some encouragement to local girls to study STEM subjects.

講演例 2
浦原の星女子中学・高等学校
(2019年6月開催)

テーマ
「3つの謎と天文学への冒険」

講師
Dr. Varri, A.L. (東京大学)
[イタリア]

本講義には、高校1年生から3年生までの83名が参加しました。当日は、生徒主体で進行了。まず生徒から感謝の言葉と学校の簡単な紹介をいただきました。続いて Dr. Varri から「天文学の3つの謎」と「女性研究者としての生き方」について講演がなされました。その後の質疑応答も、自身のことや高校生へのアドバイスを例え話とユーモア溢れる語り口で話されていました。最後に生徒から講義を受けての感想とお礼の言葉がありました。

An extract from the leaflet on the JSPS Science Dialogue programme, as one of the two National promotional cases presented in FY2019 (https://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/data/SD2020_JP.pdf).

The lecture was structured in four parts. First, I introduced my research field, stellar dynamics. Second, I presented the main questions I am trying to answer with my research activities, which are: (1) How did the first stellar systems form in the early universe? (2) Is there a 'missing link' between stellar and super-massive black holes? (3) What is the limit of the presence of the invisible 'dark' matter in small stellar systems? Third, I described my academic and personal background and the professional journey which took me to the University of Tokyo, thanks to the JSPS Programme. Fourth, I have described the academic path

Voice! from Alumni member

Voice! from Alumni member

required to become a professional scientist, offered several suggestions on how to develop resilience and confidence (which are often lacking in women in science), and presented - as positive role models - the profiles of some female astronomers within the Department of Astronomy that hosted me at the University of Tokyo. Finally, I have taken questions from the students. Their questions have been numerous and well-posed, both about further details of the scientific content, as presented in the first two parts of the lecture, as well as more information about my typical workday, and my experiences as a child and as a researcher abroad.

Before my visit, I provided the students with a written summary of the lecture, a glossary of the keywords in English, and some suggestions for free online resources in Japanese (e.g., YouTube videos, Wikipedia articles etc). On the day of the lecture, I offered an explicit encouragement to ask questions and make mistakes, which contributed to putting the students at ease. The audience was composed of about a hundred students, some teachers, and some parents. After the lecture, a journalist from The Yomiuri Shimbun, a Japanese newspaper, interviewed me for a feature article about the event and my research activities, for which I was very grateful. But the most rewarding aspect has been to receive, a few days later, some delightful feedback from the students, kindly translated in English for me by Takano-sensei: "You gave us some easy examples so as to make us understand better, and I was able to keep up with you." "Now I feel strongly that I want to understand what I don't understand." "You love space so much. I was moved and impressed." "I'd like to consider what attitude I should have to prepare for my study as a woman. I was very interested in and impressed by your project."



From left: Ms Mika Koyama (author of the article, alumna of the Urawa Akenohoshi School), myself, and Mr Eiji Takano, Chief of Science at Urawa Akenohoshi Girls' Senior High School in Saitama. (Photo: Mr Hidenori Sasaki, Digital Media Manager, The Yomiuri Shimbun).

The unusual combination of a foreign women scientist delivering an astrophysics lecture at a girls' high school somehow gained further visibility: my lecture has then been selected as one of the two National case studies for the JSPS Science Dialogue programme in FY 2020, and I have been invited to present a talk summarising my experience during the "European Research Night" organised by EURAXESS and JSPS German Alumni Association at the headquarter of Carl Zeiss Japan in Tokyo.



Presenting a talk on my JSPS Science Dialogue experience during an the "European Research Night" organised by EURAXESS and JSPS German Alumni Association at Carl Zeiss Japan, Tokyo in October 2019 (Photo: Dr Thorsten Weber).

Only a few days after that event, my time as a JSPS Fellow was over, and I returned to the University of Edinburgh in Scotland, where I took up one of the inaugural UK Research and Innovation "Future Leaders Fellowships", which enabled the creation of an academic position jointly between the School of Physics and Astronomy and the School of Mathematics. Professor Fujii organised a wonderful farewell dinner for me, together with the other members of the group. Already the subsequent summer she was supposed to visit me in Edinburgh, but, unfortunately, the global pandemic and related travel restrictions have required us to postpone our joint research activities. I can't wait to pick up where we left off!

Voice! from Alumni member

読書新聞 オンライン

<速報> 「400勝投手」金田正一さん死去…86歳

教育・受験・就活 > 中学受験サポート > 会員校だより > 浦和明の星女子中学・高等学校

宇宙物理学講義を理解できる英語力…浦和明の星

2019/07/23 05:21

浦和明の星女子中学・高等学校（さいたま市）は6月22日、東京大学大学院で宇宙物理学を研究しているアンナ・リサ・バリー博士を招き、宇宙の成り立ちの謎や女性研究者としてのキャリアなどについて英語で講義を受けた。同校は受験対策にとどまらない英語力が身に付くよう指導しており、生徒たちは英語を使って学ぶさまざまな世界に親しんでいる。

宇宙物理学から女性研究者の生き方まで

バリー博士はイタリア出身で、イタリア、アメリカ、イギリスの各大学や研究機関で宇宙物理学を研究してきた。現在は日本学術振興会（JSPS）のフェローシップ制度で招聘され、東京大学大学院で共同研究をしている。JSPSは、このフェロー（外国人研究者）を高校に講師として派遣する「サイエンスダイアログプログラム」を実施しており、今回は参加を希望した同校での講義が実現した。



バリー博士に英語で質問する生徒たち

会場となった講堂には高1から高3までの希望者約90人が集まっていた。講義の前に高2の生徒が、「世界的に活躍する研究者であるバリー博士から天文学を学べること、また女性でありながら学術研究の世界で活躍するお話が聞けることを楽しみにしています」と英語で歓迎のスピーチをした。



Farewell dinner with Professor Fujii's research group. The women of the front row, from left: Dr Rieko Momose (JSPS Fellow), Prof. Michiko Fujii (Associate Professor, Dept. Astronomy, Univ. Tokyo), myself, and Ms. Yukari Tabuchi (Administrative assistant) in Tokyo, November 2019.

Extract from the article appeared on The Yomiuri Shimbun:
<https://www.yomiuri.co.jp/kyoiku/support/information/CO036549/20190722-OYT8T50055/>

JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)

Please join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI)!

As a former JSPS Fellow, we would like to ask you to join the JSPS Alumni Association of the UK and the Republic of Ireland (RoI). Our Alumni Association was established in 2003 and carries out a number of activities throughout the UK and RoI with numerous benefits for members. One of them is "The JSPS London Symposium and Seminar Scheme." The aim of this scheme is to provide support for members holding a symposium or seminar and to create high quality collaboration in cutting edge/ internationally competitive areas at institutional or departmental level between research institutions in the UK or RoI and Japan. Under this scheme, JSPS London will partially support the following matters*:

*The detailed support is subject to change.

- 1 Costs for inviting symposium/ seminar speakers from Japan
- 2 Costs for hiring a venue, printing materials, advertising and so on*
- 3 Strategic support to help advertise and organise the event.

The application details of this scheme will automatically be e mailed to registered Alumni members during our next call. For further information please contact JSPS London by email at enquire@jps.org. Again, this is exclusively open to the JSPS Alumni members.

So why not join us today?

Joining us
 Simply register your membership here
https://www.jps.org/alumni_about/
 Once registered you will receive an ID number and password to access the Alumni Association web pages and can start networking.



Events organised/supported by JSPS London from July 2022 to September 2022

- **JBUK annual meeting**
The 4th Survival Seminar in the UK
JSPS London, 6 July 2022
- **Pre-Departure Seminar**
Online, 11 July 2022
- **UCL-Japan Youth Challenge 2022**
Online, 5 August 2022

Future events organised/supported by JSPS London

- **JSPS Programme information event**
Online, 7 October 2022
- **Pre-Departure Seminar**
Online, 11 November 2022
- **JANET Forum 2022**
Hybrid (Berlin, Germany & Online),
24-25 November 2022
Details: <https://www.janet-info.jp/en/forum/>
- **JSPS London Symposium and Seminar Scheme**
**“Non equilibrium dynamics, thermodynamics and
fluctuations”**
Hybrid (University of Nottingham & Online),
12-15 December 2022
- **JSPS London Symposium and Seminar Scheme**
**“The Social World of Butoh Dance: Screening an
Unseen Performance from the 1970s”**
Hybrid (Kingston University & Online),
17 December 2022

JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

Application Schedule for FY2022/23

Fellowship Programmes

*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Recruitment	2022			2023~											
				Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Later		
Summer Programme	Pre/Postdocs	JSPS LON	-		28th								Core period: Jun-Aug					
Pre/Postdoctoral Short Term (1-12m)		JSPS TYO	1st Call (FY2024)													TBA	Apr2024-Mar2025 (TBA)	
			2nd Call (FY2023)			13th							Aug-Mar2024					
			3rd Call (FY2023)									2nd					Jan2024-Mar2024	
Postdoctoral Standard (12-24m)		JSPS LON	1st Call (FY2023)		7th					Apr-Mar2024 (TBA)								
			Final(2nd) Call (FY2023)									TBA					Nov-Mar2024 (TBA)	
Postdoctoral Standard (12-24m)		Royal Society	2nd Call (FY2023)								2nd					Sep-Nov		
			1st Call (FY2024)												TBA	Apr2024-Sep2024 (TBA)		
			-													Sep-Nov (TBA)		
Invitational: Long Term (2-10m)		British Academy	-			TBA				Apr-Nov (TBA)								
	-																	
Invitational: Short Term (14-60d)	Mid Career to Prof level	JSPS TYO	-												TBA	Apr2024-Mar2025 (TBA)		
2nd Call (FY2023)										2nd						Oct-Mar2024		
BRIDGE Fellowship	Alumni Members	JSPS LON	1st Call (FY2024)												TBA	Apr2024-Mar2025 (TBA)		
			-			19th									Jul-Mar2024 (TBA)			

Application period or deadline Fellowship starting time

International Collaborations

*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

Programmes	Suitable Applicants	Apply to	Duration	2022			2023~										
				Oct	Nov	Dec	Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Later	
JSPS London Symposium & Seminar	Alumni & JBUK Members	JSPS LON	Symposium: 1-3 days Seminar: 1 day				9th								Jun-Feb2024		
Bilateral Programme [A]	Research Groups	JSPS TYO Royal Society	Joint Project: Max 2 yrs													TBA	
Bilateral Programme [B]		JSPS TYO	Joint Project: Max 2 yrs														TBA
			Joint Seminar: Max 1 week														TBA
Core to Core Programme	Institutions/ departments	JSPS TYO	Max 5 yrs	3rd											Apr-Mar2028(Max)		

Application period or deadline Project starting time

*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

Programme Contact Information List

Fellowship Programmes

■ Summer Programme

[British Council in Japan](#)

■ Postdoctoral Standard

[JSPS Tokyo](#)

[The Royal Society](#)

[The British Academy](#)

■ Invitational Fellowships

[JSPS Tokyo](#)

■ Pre/Postdoctoral Short Term

[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

■ BRIDGE Fellowship

[JSPS London](#)

International Collaborations

■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme

[JSPS London](#)

■ Bilateral Programme

[JSPS Tokyo](#)

■ Core to Core Programme

[JSPS Tokyo](#)

■ JSPS International Joint Research Programme

[JSPS Tokyo](#)

Follow us on ...

For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jsps.org/members/?page=regist>

JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jsps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom

Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669

E-mail : lon-info@overseas.jsps.go.jp | <https://www.jsps.org>

JSPS London ニュースレター

監 修：小林 直人

編 集 長：安原 幸司

編集担当：滝沢 航平